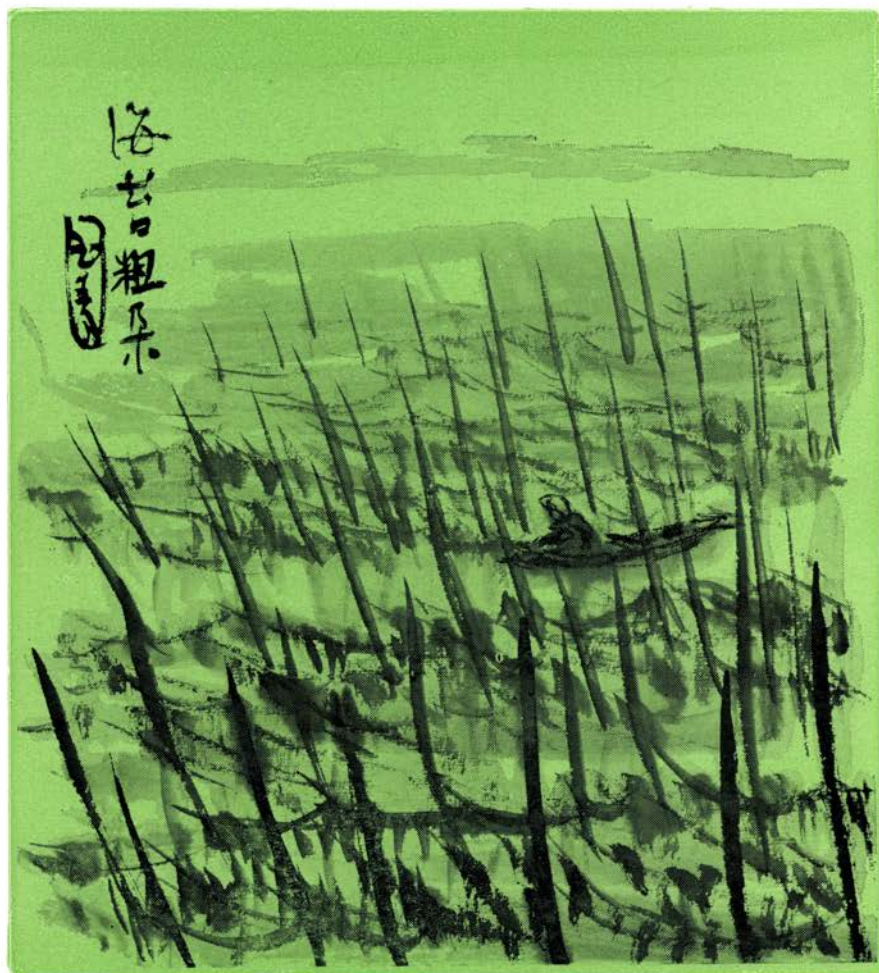


川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和四十七年二月二十五日 印刷
昭和四十七年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷五三八号



No. 538

川柳山陽新幹線に試乗

三月号

山陽新幹線試乗の

左から

中島生々庵氏

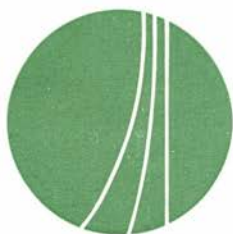
橋高薫風氏

児島與呂志氏

(カメラ・季贊)



川柳塔社同人の
シンボル・バツジ



一個五百円(桐箱入り)

送料 本社負担

老人の日記より

(私はこう思う)

若い氣でいても求人欄の外(草一郎)いくら力んで見ても、瘦せ我慢を張って見ても、世間はみんな若さを要求しているのです。雇いたしの年齢層からはみ出しているような年齢ではさっぱり駄目なんです。男の五十は働き盛りなどと云う世間の甘い言葉に乗ってはいけません。しっかり眼を見張ってごらんさい。あなたの立っている一歩向うは急勾配の下り坂になっているのです。墜落のショックを受けるまでに、この坂を如何にころがり落ちる可きかの準備工作が必要なのではないのですか、私達の棲む地球と云う星の世界も、その日その日のいとなみを繰り返しているのです。私達はこの大きな自然の成行きに歩調を合わせてゆかねばなりません。秋迫る灌木の枝は紅葉して山肌を飾り、

樹齡を誇る深山の古木は伐採されて、大伽藍の棟木となり、溪流をのぼる鮎は釣られて焼かれ、雉は射られて鍋で煮られるのも、みんな地上の移り変りになくてはならぬ出来事なのです。私達は唯だまって生きていけばそれでよいのです。何も考えずに生きていけると云う事自体が大自然の成行きにお手伝いをしていののだと云えそうです。

板の間に這うゴキブリも、砂の上を往き来している蟻も、花から花へ飛び廻る蜂も蝶も、みんな大自然の法則に忠実な生きものだと褒めたたえねばなりません。地球と云う世界の榮枯盛衰の鍵をにぎる者は誰も知らないのです。ただ知っている事は、すべてのものが何も言わずに動いていると云う事だけです。

(麻生 葎 乃)

倅せが逃げそうだからチヨコを伏せ

後学のためにと先輩おちよくられ

暖冬に別の媚態は春の音

押しかぶせるように敗北感突き

涙の重さ敗けた兵士の崩れる日

中島生々庵



山陽新幹線試乗の生々庵主幹

力は信

二十八年間も横井庄一さんの肉躰を支えたのが、エビやカエルや木の実だけでなく強靱な精神力であった事は想像に難くない。その強靱な精神力の源はと言えば「絶対信」であろうと私はうけとりたい。教わったり導かれたりでなく、面壁九年の達磨もいささか驚く開眼悟道が必ずや育っているとうけとりたい。私達のようにその日その日の倅せや愉快ばかりに生きがいを求める都会では高層建築や情報集めのアンテナが立ち並んでいる。そうした近代科学の屋根の下には人間同士の不信

感や生活上のストレスが深刻な一途を辿っている。従って迷信とか非科学的とばかり言っておれぬあせりも無理からぬ事で、タクシー運転台にお護り札が貼られていたり恵方詣りに歳徳神のゆく方を探して見たり、今日の一日、今年の一年を追いかける禱りが慌しい。そのコマ切れの禱りと、気の遠くなるような横井さんの「絶対信」とは全く異質的なものである事は間違いないだろう。そして確かに信は力なりである。

川柳塔三月号

座右の句

飲んでほしやめてもほしい酒をつぎ (霞乃)

私の句

合掌をしても雑念かけめぐり

天正千梢

川柳塔三月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

信は力

川柳塔……(同人作品)

卒業式

私はこう思う……

川柳初篇研究……(百四)

前田喜代人・故岡崎重義・清
川端柳風・故高須唾三味・丸

博美・藤井和雄
十府・岡田甫

「旅人」以後の麻生路郎作品……(15)

天皇さまと海老のシッポ

一分間の柳論

大鶴喜由……(61)

山本素郎

近作柳樽

女流作家ベストテン

秀句鑑賞……(同人吟)
近作柳樽

近詠

中島生々庵選……(4)

北川春巢……(2)

麻生霞乃……(22)

傍島静馬……(21)

東野大八……(24)

戸田古方……(57)

山本素郎……(62)

川村好郎選……(30)

正本水客……(42)

西尾葉……(38)

菊沢小松園……(39)

諸家……(29)

卒業式

北川春巢

三月と聞くと、私の頭には決って卒業式が浮かんで来る。私自身の卒業式は戦前のことなので、もうほとんど覚えてはいない。私の息子たちの卒業式も、もう数年前に終わった。卒業式が頭に浮かぶのは、私の仕事が看護学院院长であるから、でもないようだ。看護学院に来て、今度が初めての三月であるのだから……。

今まで病院に勤めていた間、三月が来る度に、何度も何度も卒業式のリハ・サルを、部屋にいて聞かされたからではないか、という気がしてきた。どんなことをしているのか知る由はないのであるが、講堂から、「蛍の光」や「仰げば尊し」の練習の歌声が、医局まで聞えてくる。時はわぁっという歓声も上がる、次にまた歌の練習がある、という繰返しは何日も続くのであった。そこで私はリハ・サルを、昨年発表した。声だけ聞いてみると、リハ・サルは楽しそうだ。ところが、本番の卒業式になると、事情は一変して、泣

川柳五十三次……(十八)……………富士野鞍馬……………(40)

二賞候補作品中間発表……………高鷲亜鈍……………(29)

札束と……………山田季賛……………(26)

川柳山陽新幹線に試乗……………傍島静馬・西田柳宏子・不二二三夫……………(46)

雅号ぶっちゃけばなし……………藤井二三……………(63)

女性優位……………本多柳志……………(45)

再見ノわが満洲……………中川晃男……………(51)

老いの人生の至境……………福井野迷路……………(53)

初歩教室……………本田恵二朗……………(50)

大萬川柳「波」……………川村好郎選……………(52)

柳界展望……………(薰風)……………(54)

本社二月句会……………(庸佑)……………(56)

各地柳壇……………(文秋)……………(60)

「通行止め」……………新谷笑痴選……………(48)

「助手」……………井阪東天紅選……………(48)

「ヒナ祭り」……………若柳潮花選……………(47)

編集後記……………(一三夫・葉子)……………(65)

座右の句

雜草の役だ目立ってはならず

(小松園)

私の句

忍耐忍耐だれかに嘔やかれ

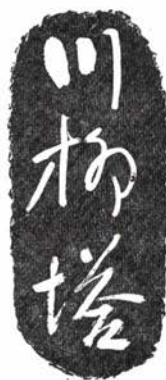
野坂 つき子

けてくるのだ。みんなこらえにこらえていて誰か一人がすすり上げると、もういけない。みんながすすり上げてしまふ。すると参列者もつい目頭が熱くなる、という具合だ。この異常な光景とこの感激とが、頭にこびりついていて、三月といえば、卒業式が頭に浮かぶのだと思う。

私は式の後の謝恩会に出席して、スピーチを指名された時、福沢諭吉翁の心訓の中にある「世の中で一番楽しく立派なことは、一生涯を貫く仕事を持つことです」という言葉を持ち出して、お祝いを云ったことがある。翁のこれに続く言葉に「世の中で一番みじめなことは、人間として教育のないことです」というのもある。現在の看護婦教育は、高校卒業後、三年間もかかり、人間としての教養にも欠ける所はない。私はその言葉をも引用して、一同の門出を祝ったことである。

諭吉翁の言葉は、なおそれに続いてまだ五カ条ほどあるのだが、その中に「世の中で一番淋しいことは、する仕事のないことです」というのもある。

ところで川柳には卒業がない。そして一生涯勉強することもできる。私たちは幸福である。中途退学などすることなく、学び続けたものである。



中島生々庵選

倉敷市 小野克枝

新しい帳簿作って三が日
遙かなる道へ小さな石を積む
ワンマンを通して寒い父の席
失敗を経験と説くむつかしさ
謝って帰る明日のある暮し

松江市 中川晃男

おめでとう原点に戻って考える
分校を閉じてお山に雪が来る
造成のダンプに神話の山も揺れ
衣食足って骨董を漁り
空と湖のある町にてわれ死なん

大阪市 正本水客
杉丸太みがく女の手から冬

きれいな湖の表面だけを見ている眼
ネクタイの柄にボツリと妻がふれ
遠吠えに似て歴史ささえてきた重み
或る結婚

坂のぼる二人に春が見えてくる
八尾市 香川酔々

解散が近い二の膳・記念品
湯どうふの湯気を京都の水が立て
平和です餅こんがりと焦げてくる
起上り小法師へ仔猫困り果て
おとこ峯おんな峯だき山眠る

門真市 福島鉄児
冗談の浮気見ぬいているも妻
子供だけ親が預かる共稼ぎ

花名刺男心を見抜いてる

石橋を叩いて渡るのも師走

会釈する人が記憶の中になし

大阪市 本多柳志

細う長う義理をつないだ年賀状

母と娘で女ならではという話題

盃を伏せて切り出すかおになり

絞れば血潮したたりそんな社会面

眠りから覚めたら決議されていた

豊中市 戸田古方

ニュースまたおんなじ声して違ごた顔

あんな晴着でも晴着三日午後

燦然と一期一会に畏まる

マニキュアの香り残して娘が降りる

ママ・パレーのリーダーさんの日本髪

堺市 吉田圭井堂

妬くネタを採し廻っている閑居

春うらら香具師大仰に人をよせ

アルミ貨で福を呉れとは胴欲な

七色の錠剤呉れてお大事に

着飾って出るホステスのスラム街

宝塚市 傍島静馬

愚痴云わぬようになったらお迎え来

余生あと何年などと思うまじ

山陽新幹線試乗（一句）

作業衣になったが七十の及び腰

孫の発見驚くふりして聞いてやり

指名気になり出した酒の味

和歌山市 垂井葵水

智恵の輪のひとつだけとけ年終る

鏡餅ひびわれ常の日に戻り

ゆとり見せ心中おだやかならずいる

嘘を言い切った心に風当り

雪が舞う海の深さを知らず舞う

岡山県 浜田久米雄

きっぱりと断る言葉口に出ず

甲斐性がないのに既製服がいや

口下手は字を読むようにして話し

長生きをせよときれいな花が咲き

しやつきりと立てば仕舞の腰になり

大阪市 大坂形水

助手台にまで溢れさす家族連れ

アベコベの値札のままで出てしまひ

良いお湯でしたとタオルを巻いたまま

紫の蒲団に入ってくすぐったい

担保ない者は借れない救済金

大阪市 山川阿茶

地下地下と人間もやしにするつもり
お正月ハワイへ逃げる手もおぼえ
ドル・ショックせめて忘れてお正月
老・病・貧みんな抹殺したい文字
老医連つくるじゃないかと云う提案

倉敷市 小幡里風

云い訳が上手に言えぬお人好し
児をあやす術も知ってて名医なり
準備OK父となる日の深呼吸
さいはてにくちる決意の終列車
口べたも真実だからどもらない

高槻市 若柳潮花

歳末のピラ立飲みで足で舞い
初舞台顔司の腕を見る鏡
嫁の荷のひとつに金で買う名取り
人形ケースへ入れて置きたい藤娘
閑人がマスコミに似た口もきく

高槻市 福田丁路

楽しみを先取り過ぎた身の嘆き
身に覚えはないとは云えぬ請求書
クシャミした尼僧の顔のあどけなさ
景気よく素うどん一丁通される

息のあるうちにと思ふ事多し

平田市 久家代仕男

年始客送り碁敵むかえられ
元日を買い溜めて待つ冷蔵庫
食うためにおんな土工のみだれ髪
内職の切れ目大根刻む母
みずうみは時雨みず鳥肩を寄せ

下関市 志賀木石

俺が俺取り戻してる酔うている
金溜めて勤勉日本嫌われる
勤続表彰のない男
生きている限り痛い目もする
老躯に鞭打って邪魔がられ

岡山県 浜野奇童

悔いばかりためた日記を閉じて新春
初日の出覧も春の音をたて
先生をはだしにさせた鬼ゴッコ
何のメモだったかいなと妻を呼び

Nさんの結婚式に参路

熱烈な恋そのままにゴールイン

貝塚市 野坂つき子

視野せまき女はうつぶん貯めている
ケセラ・セラでは幸せは逃げてゆき

終電車破れた愛も乗せて出る
三界に家なしうちもその一人
風に舞う枯葉にも似て失意の日

東京都 増田次章

ご多忙がわざと遅刻をしてみせる
あてにせぬ処で朗報ころげこみ
ふところの具合がケチに押しきられ
団体の横暴なかの一人に俺もあり
長髪もミニもマキシも馴らされる

出雲市 尼緑之助

元旦の計も小さくなる出勤
まずまずの新春か雑煮へ無事な顔
数の子は一ときれずつの御乾盃
着こなしのくずれ和服の初詣

堀江正朗氏の還曆

新しい原点ここからよい一歩

愛媛県 村上旭童

たまの雪山茶花なにを散り急ぐ
パトカーの今日はドライブめく日和
胴ぶるいしながら密柑好きという
父程の歳の男だ叱るまい

この奥にダムあり川はやせ細り

八尾市 高杉鬼遊

太陽が欲しい川のある街虹の街
女傘借りてしあわせ戻る道

核家族苦勞知らずの痴話喧嘩
三人目生んで男の愚がわかり
手品する素速さ定期券通る

松原市 谷垣史好

閏年一日さみしい日がふえる
春のどか相撲甚句が聞えそう
正眼に構えて堅苦しく生きる
贅沢なけむり炭火でさんま焼く

十姉妹一羽死ぬ

石置いてここが墓だよ十姉妹

大阪市 河野君子

個性のない趣味に生きてる暇つぶし
決意だけ燃えてまどろむ松の内
祝日に降って慈雨もぼやかれる
暖房が花の余生を急がせる
筆乗せる短冊の白面映ゆい

大阪市 金井文秋

ふり出しの間違いいまさら云うたとて
分譲住宅思い思いの花を植え
みだらなる夢に若さがあるを知る
執念の鳶は枯れてもしがみつ

親切な心の裏は思うまい

今治市 越智 一水

拝み合う心共栄とも思い

考えてみよと静かに雨が降り

ゴミ戦争その原点はもうけてる

元旦も妻エプロンのままで座し

元旦に目覚しとぼけたように鳴り

下関市 国弘 半休門

一対の箸にも持つ位置挟む位置

缶ビール粗相した泡拭いて謝す

同権の男女身なりがいれかわる

他所の娘はかたくな俺を恐がらず

週刊誌持って帰って置き場なし

岡山県 池田 古心

背伸びすりや叩かれ人生面白し

手を握りや手は恥じらいもなく答え

生き甲斐は波乱万丈あればこそ

椅子蹴って老農となりし短気悔ゆ

六法で裏街道の智を磨く

青森市 工藤 甲吉

無い人へ貸して無手勝流で負け

君よ悲観し給うなかれと強精剤

豆腐一丁きょうは年より二人きり

一夜明けて離婚話はケロリとし
一月一日も金は出てゆく

倉敷市 水粉 千翁

初孫産まる（十二月二十日）

安産の知らせかたじけなくも泣け

興奮の夜祖父となる朝が来る

のぞいてるもめてる似てるとこばかり

もの足らぬほどほめられる孫娘

地球から孫の重さを抱き上げる

大阪市 小出 智子

忘れずに薬飲む身で春を待ち

ちっちゃな個性が母を戸惑わせ

望郷のふとくちずさむ童唄

平凡な暮しのよさがわかりかけ

背伸びしている爪先の痛いこと

大阪市 水谷 竹莊

ランプが見合いと知って負けつづけ

旅行好きプランたてすぎまた迷い

平凡に鍵と暮して監視老け

かくし芸好きで益まだ伏せず

地下街に名所作って客を呼び

大阪市 吉岡 美房

息子 孫しあわせ過ぎる初詣

日本中おんなじネタで笑わされ
正月やないかと巡査からまれる

松の内もう斗争のビラを貼る

えべつさんすんだんやでと気合入れ

倉敷市 野田素身郎

三カ日朝夕パイプの掃除する

諍を持ち越しました除夜の鐘

一対一に偶然なつたのを誤解

円満に解決しそう爛をする

謝罪に行く相手にトイレットで出合い

倉敷市 本田恵二郎

亡父母の碑に彫る一句生みおとし

その一句墨くろぐろと心こめ

真賀石の艶よく一句しかとのせ

亡父母よ冥せよ石の艶をなで

碑の句

松籟に抱かれて安らかな眠り

大阪市 橋高薫風

夫婦にはなれなかったが冬の旅

枯枝に鳥 幾世の友情か

革命をめぐらすに湯に身が浮くよ

志操とや嘴にある鼻の穴

手に足に関節のある寒さかな

大阪市 不二田一三夫

ニセ医者の裏口入学さえもせず

炊事ぐらい教えておこう二日制

山陽新幹線試乗（二月十日）

58分でここ大阪府岡山市

寄席（二句）

芸人の何かわびしい肩が好き

やけくそで演ってるようなへ手をたたき

大阪市 西出一栄

清荒神代参させて気をやすめ

かけまくもかくこし賽銭もの足らず

樹氷の美 人から聞いて憧れる

人生の黄昏老斑を数え

岡山县 直原七面山

恋に酔い恋の空しさなど知らず

ロマンスも無く未亡人痩せ細り

女の香を乗せて春風露路を抜け

一線を守って逢いつづける二人

大阪市 福井野迷路

余世せめて取りこぼしなく進まんか

口よりも愛の心は眼から受け

テレビこわれ己が心に里帰り

やくざ狩りやくざ映画は花ざかり

大阪市 天正千梢

おそろしい事に暇がありすぎる

捨てたつもりで居てくれとは子の便り

ご先祖もお喜びローソクがゆらいでる

心経をあげて一日のしめくくり

鳥取市 河村日満

松山にて (三句)

公害の煙ゆっくりと城つつむ

旅疲れすこしぬるめの湯が癒し

午前七時みやげ屋にいるふところ手

ひかり号にて

二〇〇軒の速度ヘビル酌ぎこぼし

尼崎市 黒川紫香

ご遠慮をした相手から来る賀状

しわだらけの手で出るお茶も故郷の味

捨て犬を抱く娘逃げる娘寮の朝

赤電話もう一言が云えず切れ

京都府 大鶴喜由

仲人の嘘にくからず添うて見て

人の肌逆さにのぞくかぶりつき

添うことのおあずけになる年まわり

断られても元々の気があるもよし

出雲市 弘津柳慶

子は角瓶父はチロリのお正月

帰省の子へ父は気軽に風呂を炊き

再婚へまたまた苦勞つきまとい

退院へ希望の空が晴れている

島根県 藤井明朗

米寿の父がいて私も負けられず

嵐にも中年太りにくらしい

初恋のひとの不幸を聞きたより

たばこ止めてからたばこの害を説き

藤井寺市 西いわを

何気ない訛りへ故里の人を恋い

隠れんぼしているように消えて逝く

休耕田値上るのを待ちあぐむ

事もあろうに金の亡者が脱税し

竹原市 山内静水

守衛室のぞけばこげてる鏡餅

道ならぬ恋ノ一ネクタイの似合う方

一滴も飲めぬ男の黒田節

足の爪切り切り話しを聞いてくれ

伊丹市 小川静観堂

春着の娘に膝をかがめてお辞儀され

天寿を完うしつつあり生き甲斐か

楽しかった辛かった昔の恋の曲

戒名はもう付けた亡妻の許へいつ往こか

大阪市 有信新之助

串かつのこの串削る人もおり

のし袋安いの買うて叱られる

えべつさんに大阪らしい雨が降り

ひっこんだ道理そのまま忘れられ

米子市 八木千代

婦省子を発たせて昼間から眠り

三日ほど置いて気強い返事書く

切替えもソフトに嫁の城となり

祖母となる日へおぼろげな手まり唄

米子市 林瑞枝

木枯の舗道にミニの胸を張り

古い葉を落して芽吹く春の色

指先に恋の視線がふと止まり

詩情いま生活と闘う色にあせ

小松市 馬場魚山

内陣へ冬陽がとどく七回忌

札東で売上を知る支配人

雪つけたまま夕刊は投げこまれ

返事持つ故郷法要の日が迫り

大阪市 木村水洞

元日の勤務すませて初詣

下戸は下戸同士で楽しい三カ日

雪の害知らぬ都会の雪見酒

へそくりが出来て発言力が増え

宇部市 石川侃流洞

柏手へいまさしのぼる陽のぬくさ

小春日へ袷の肩が少しこり

簡単に見せる年期の手のさばき

大乱売目先の欲を釣るしくみ

米子市 石坂新雪

ゆるしてと母へ泣きつく娘がきれい

いい話向けても怒るところが似た

あと味の悪さ前歯だけで笑み

退院して

不規則な家庭療法は酒がつき

大阪市 宮尾あいき

除夜の鐘六十才の音で聞く

散ったのか散らされたのか雨のバラ

末っ娘の荷の出た部屋に一人居る

福笹できれい所も見えかくれ

松江市 柳楽鶴丸

八つ当りする女房が憎めない

ストの是否論する妻も労働者

初明り四十妻の顔を見る

男ですしかれたレールは走りません

大阪市 中川 滋 雀

忌中の初春

せい一ぱい忌中に耐えてみるテレビ

ささやかな誓いを妻と温め合い

天下晴れて朝寝楽しむ初春の閑

裏表すかしてボチを値踏され

竹原市 森 居 菁 居

女なら泣けるところを酒と孤と

夜のグラス思索をひとりじめにしよう

鍵っ子の瞳にママに似た陽が沈む

解らない絵を解ろうとして悩み

倉吉市 奥 谷 弘 朗

損得のない足並みがよく揃い

孝行を無駄だと思ふ子に育ち

アンバランス養子も親もそう想い

孫抱いて暮す余生が消えかかり

東大阪市 竹 中 肖 二

半年の空白やと職があり

定期券持って日曜街に出る

除夜の鐘遠くを走る救急車

倅せと思う訪ねる客があり

松江市 小林 孤 呂 二

地に還るから墓石も傾けり

簡易水道住めば都でこと足りる

外出着しばらく買わぬ妻へ選り

ブルドーザー人の悩みも押しまくり

松江市 岡 崎 祥 月

道楽は一本生きる道一つ

冗談を言いなさるなと茶をにごし

無軌道を走る男のエゴイスト

頼るまい子等はそれぞれにげるもの

大阪市 河 井 庸 佑

難題を出して実力たしかめる

倒産へプライドなんぞ言うとなぜ

おとなしい口調できついことを言い

善後策行きづまっている会議室

笠岡市 松 本 忠 三

本職をたずねられてる芸の巾

ガラ空きのバス農村の夜静か

喪中だというに正月やって来る

匍い匍いがママへ向って突進し

岡山市 川 端 柳 子

似顔絵の眉の丸さが気に入らず

ピンチに強い女だまって彩を選ぶ

傷あとにまとも北風南風

千翁氏 還暦、初孫誕生に寄せる

寄せる波引く波よるこびごとばかり

鳥取県 川崎秋女

その中の一枚人目を引く賀状

どんど燃ゆ子等振り向かずどんど燃ゆ

青春に悔なしこゝらで妥協する

同情の酒に左遷が酔えず居る

大阪府 西川誓二

何か知ら心に迫る薪能

無い袖も振らねばならぬ意地があり

故郷を睨で追えば母在わす

鍋煮える頃には銚子に一と雫

京都市 松川杜的

神矢一本六十秒ほど舞うてくれ

ゴキブリに近代設備笑われる

おばあちゃんにも十八番があつた百人一首

句集持つて一人ぼっちの喫茶店

兵庫県 大江秋月

人間の屑も掃き出す終電車

喫茶店一人で行けば味気なし

造花にも塵がつもって二年暮れ

婿どのが来るとて特級買つて待ち

神戸市 小浜牧人

エンジンが漸くかかる小正月

子の夢の天まで届け奴唄

搦印押す母子へ僅かな金でなし

月給に限りある恋地味になり

島根県 堀江正朗

ロボットに劣る動きを繰返し

アゴ上げて老いの片意地張り続け

日稼ぎの昨日遊んだ穴を埋め

妻の目を意識した時はずむ手よ

笠岡市 木山遠二

三寒を老ぼれ四温を若返り

長生きをして憲法を喜ばず

君が代の文句を音痴間違える

わが初夢

過去の人がニコニコと出る老の夢

大阪府 川口弘生

古古米は物価安定の味がする

男を養ない二号とさげすまれ

福笹の波を巡査が泳ぐ宵

そむかれた女を憐れという男

東大阪府 宮西弥生

母と新年をすごして(二句)

久々に母と過せる朝寝坊

そのひとの噂がこわい先きに酔い
満ち足るを知らぬ女の赤い爪
休日の和服へ女ごころ揺れ

岡山県 大森 娛 句 楽

献身の光りも鈍く古稀の錆
百七ツ後の一つは旦の鐘

長酒へ拍車をかける雨が降り

(敬愛の姉の逝去に弔む)

ローソクも泪を流がす御念仏

奈良県 宮 口 笛 生

正月も仕事に父のお弁当

夜に入って雪になりそな冬の雨

凍てついた道水銀灯も凍る色

軍歌なら何でも知ってる人さみし

島根県 小 砂 白 汀

触れるものみな切り裂いてどうなさる

仮面めくれば鮮血したたりぬ

以心伝心先方さまもふくれ

単細胞鏡のように反射する

呉 市 林 野 甦 光

うれしさを心のままに開ける窓

荷かざりへ目と目でケチをつけたがり

大粒の涙でへたな芝居する

食通に炭火の味を見つけられ

岡山県 出 原 敬 一

人生のこころで手拍子したくなり

資産家の火事に浮浪者背も温め

自殺未遂ついに天寿を全うし

借金を払えばむこうから笑顔

愛媛県 渡 辺 曉 童

こわさねば万円札も長居する

じいちゃんはけちやといわれまいとする

新年の電話貸し借りにはふれず

マダマダマダ元日はマダ明けず

堺 市 高 橋 千 万 子

隣から遠廻りして来た賀状

木に竹をつなぎその先考えろ

来なんだと云わせぬほのかなオーデコロン

興奮がさせた背伸を悔ゆる日々

倉敷市 藤 井 春 日

汚れきった過去が悲しい恋心

コンクリのような方ネと女の瞳

日本の女見つけた京の宿

(石榴熟す)

手にとればこぼれ落ちそな紅真珠

神戸市 仲 どんたく

柿落ちて踏みにじられて秋が行き

お正月相も変りませず 男

年頭の辞から社員へノルマ課し

着飾りし同性へ寄る眼と眼と眼

和歌山市 野村太茂津

命誕生今年の春は祖父となる

紀州人とわかるみかんの皮を剥く

埴輪にもあった涙の涸れたあと

敗者復活という手もあり餅囃じる

生駒市 草深 醉 升

買え買えとばかりに相場騰げてみせ

女学生のスカーツだけが膝止り

雨もよし元旦じっくり飲むとしよう

招かざる客へ殊更夜が長く

大阪市 室谷 徹 舟

猫のよなねずみを書いた年賀状

かゆいとこあろうに仁王固定され

健康な肌は夕火を反射する

責任のないのはよく食いよくしゃべり

新宮市 大矢 十 郎

年賀状出して無沙汰へほっとする

元朝の雨はしぶしぶほめられる

娘の化粧けなさず素顔ほめてやり

夫婦対夫婦で和む松の内

鳥取県 鈴木村 颯子

散る火花鍛冶屋働く美しさ

真実を秘めてもみ消す煙草の火

野良犬が犬の鎖を嗅ぎに来る

漫画家の画いた通りに世が変る

富田林市 岩田 美代

不器用に札を数えて示談すみ

散りぎわの紅葉未練の朱に炎える

神様もミスをもとめた不倖せ

本心も見せよと鏡叱るなり

笠岡市 木山 要次

除夜の鐘心に刺さる大晦日

エプロンを外す間もない氷割る

同じこと云っても虫のおりどころ

月並みの言葉用心なさいませ

鳥取県 清水 一保

黙々と根を張り作物寒に耐え

叱かられる位置へ度胸をすえて座し

一年の御無沙汰わびる初詣

美しく余命を寒菊生きつづけ

八尾市 飯田 悦郎

倖せはギャンブルですとむすめ嫁き

石段をのぼり枯木を杖にする

谷川が厳しくなつた忘れ雪

帯になる水鳥潮境昏れる

大阪市

神谷凡九郎

もろもろの生命を喰うて人いきる

衣食住みな他人さまのお蔭です

馬鹿と怒鳴って一番自分が驚いた

自動車様がお通りやすで歩道橋

大阪市

児島与呂志

初詣なにを祈るかまだ拝み

花括ける長女おんなの匂いする

成るように成るさふとんを被って寝

大胆に見せて孤独の夜の長さ

高槻市

山田季賛

入院した一年前を笑い合い

宿直が完結編まで読ませてくれ

たこ焼きの味賞めているふらり酔い

飲み屋から賀状妻へ見せられず

兵庫県

遠山可住

フラッシュの中で心にもない握手

うれし泣き一日泣いてみたいなり

今年から長男が搗く杵の音

お雑煮の上で花かつおの乱舞

芦屋市 丸川初甫

しきたりはどうであろうと巻き直し

にが虫をつぶして本音云わぬなり

離婚して芸一筋のヒット曲

末席で内気こっそり酔うている

尼崎市 高津徹也

出直しのまた出直しをする悲慘

オートメーションの私はたった一つのネジ

支配するしないは利己があるからだ

明かさない秘密をもって人である

奈良県 石倉旅風

何のその二十歳も喜寿も同い歳

人生は然り而して独り旅

鉢の菊咲かせた誇り咲く誇り

一列に迎えてくれる鉢の菊

岡山県 坂井三葉

順調に生きて故郷を忘れかけ

制服を脱いで個性が顔を出し

末席の意見愚痴にしかとれず

督促状とうとう俺を捜しあて

松江市 吉岡通児

バングラデシユ舌かみそうなのが生まれ
例年の例で初荷が酒屋から

瞑想の煙草はくゆらすだけのもの
初詣で煩惱ゆえの願いごと

広島県 高橋 鬼焼

市場籠安いうわさを聞きかえし
ちっけなあくびをすてて一人言
元日を静かに酔うてあらたまり
その先きを聞くまい過去がこわくなる

堺市 藤井 一二三

正月も矢張り厨は妻の音
核化した子へ渡り鳥となる余生
冬至十日儲けた気持の日の長さ
草染める夕陽に今日の無為を恥じ

堺市 河内 天笑

へそくりがたまつてからのこわい夢
すき焼きの匂いの中へ遅刻する
ふりむけば尼僧もすこしふりむけり
冬の月人のねがいをはね返し

鳥取県 森田 布堂

暖冬のここは商売よくはやり
おむつ干すしあわせ女だけが知り

帰省子のこんなに眠るのにあきれ
めがね忘れた飲み屋に飲みに行き

大阪府 江城 修史

水雨降る街に友も遠くなり
人生の一コマめぐり逢うえにし
袖カバー好きではないが生きる道
倅せと思う日親子の水いらず

京都市 都倉 求芽

絨緞に馴染まぬ靴がかしこまり
理由なき虐待コップ割れてみせ
忙がしい忙がしいとは飲みに行く話
家並みがキラキラ夜汽車に朝が来る

大田市 藤田 軒太楼

世渡りの辛さを語る父子酒
子の真意解って後添考える
燃えつきて果てる命の寒椿
電話してくるとこみれば脈があり

堺市 吉岡 青香

人生の悲喜それぞれに指を折り
実盛の故事にネクタイ換えて出る
血圧の気をそこねない程に飲み
ドル・シヨックなんだと達磨笑つてる

諫早市 原田明春

会場はお色気におう水着ショー

言葉尻因縁までつけ倦怠期

座布団もつぎはぎにして子沢山

冠婚葬祭互助会もう役に立つ不幸

名古屋市 吉田水車

D51もこの山里で貨車を引き

屠蘇よりもコーヒーがよい世の移り

お年玉をねだる子もなき屠蘇を酌み

桜井市 岩本雀踊子

はした金振ると暮しの音を立て

昨日腹立てた手紙を書きかえる

うれし泣きする妻いたわりの言葉なく

姫路市 隠岐不酔

縦横に僕を測った洋服屋

孝行者仲人もなしに式を挙げ

居合わせただけで証人に呼びだされ

愛知県 大谷月都

税金が別についてるうどん喰べ

破滅へと続く怒りに身をゆだね

すり抜けたつもりの片付けやらされる

松江市 恒松町紅

馴れたとはいえ超ミニへ目のやりば

日の丸がきれいな街にしてくれる

よく見ればかつら和服がよく似合い

姫路市 村上春巳

公害がどうのへ新車のコマージュ

坊ちゃんの汽車行儀よく通り抜け

旅三日少々ガタが来たらしい

守口市 羽原静歩

休耕田に虹を探している男

三寒四温ルージュ虚しく待っている

銀行を出てから歩幅小そうなり

和泉市 西岡洛醉

振袖の恋元日をおしとやか

マイナスかプラスか赤く染めて髪

抵抗の日々へ抵抗倦怠期

倉敷市 竹内翁童

色紙も泣いてるだろう金釘流

家裁までは行かなかった夫婦の三十年

世渡りに裏道もあり今日の地位

松江市 舟木与根一

ベストテン暗いニュースで占めて暮れ

旧家にはしきたりがある鏡餅

元日がまず台所から匂う

大阪市 今西章雅

そう云う手有るかと負けて感心し

中国語今からやる気と真顔なり

過激派のデモ火遊びに落ちて行き

兵庫県 河原みのる

正月の行事ことしも一つ減し

多過ぎる田が縁談へ邪魔をする

孫娘の結納

水引きの松竹梅に結び合い

玉野市 小谷仙山

目に見えぬ杭が支えてくれるビル

馬鹿馬鹿しい話へ落語汗を拭き

恋猫の団地の夜は静かなり

宇部市 平田実男

賽銭の音にも響くドル・シヨック

初恋に出合って年甲斐ない動悸

停年者送別会

酔ってても蛍の光に出る涙

西宮市 島居百酒

若水は栓をひねって古事の真似

和服着て屠蘇酌ぐ妻にあらたまり

年玉におしゃまな挨拶する晴着

鳥取県 谷 無閑

発展の途上赤字も亦資本

化粧すれば俺にはすぎた妻となり

言いまけた妻の涙にふと詫びる

岸和田市 葛城伊三郎

腹背がある人なので敬遠す

あの家も小金貯めたか囲い出し

御殿のような家へ届いた督促状

大阪市 飛田好一

退院の日へもどかしいカレンダー

それぞれの想いを運ぶ終電車

断酒して

酒断って来る客もない寝正月

東大阪市 竹中綾女

年だなと疲れた夫を思いやる

腰弁のお菜残れば気をつかい

取り直しひいきが勝ってほっとする

今治市 小笠原青女

神経痛正月などと遠慮せず

Gパンも和服になったお正月

そらぞらしお世辞へ女口あわし

東大阪市 齊藤 三十四

カズノ子も一切ついた屠蘇の膳
孫のカメラへ老妻と腕を組み
お互の愛の深さ無口で居

富田林市 木村 弥栄子

一ツ屋根新旧不協和音をたて
諸行無常俗にまみれて旅をする
年金の杖にすがって老一人

堺市 伏見 茂美

一年のやりくり賞でて妻へつぎ
今宮戎(二句)

福ザサに髪ネットをとられたり
いつまでも友でいようとこれも恋

島根県 中島 英子

温泉でしばしのんびり小さい幸
クレヨン画猫よりネズミ大きすぎ
誤字もある母の便りにこもる愛

富田林市 板尾 岳人

山小屋に明日の登頂を練る灯り
水を汲む岩場に雑草顔を出し
帰えり待つ山の土産は無事な顔

★

北川 春巢

冬は寒いものとアンカ二つ入れ
生理日変えて来たスキーこけつづけ
タクシーに酔うを自慢のように云い
理科系へ行ける頭とおだてられ
鳥葬の話しへ行ってみたくなり

西尾 栞

テトラポットあざらしに似て冬の海
雨の波紋デザインーとして瞋つめ
もういっぺん欺されましようと言われ
お愛想で訊いた話をくどうされ
煮凝りを病気の母の口を逃げ

菊沢 小松園

表向き乳母としてする暇乞い
手加減の鞭とも知らず跳ねかえし
帯解けば帯も蛇体のうねりもつ
ジャングルで次の戦争待っていた
肥えている亡者の鬼はきつい鞭

川村 好郎

こせこせと娘に云われ嬉しがり
お隣も増築をした日の波紋
かかる世も地球狂いなく廻り

貸金に触れず寒中見舞来る

へだたりはあれど頼もし子の歩み

若本多久志

いつもお元気でとは歳を知っており

ドライブはおやめになってと歳を言う

金婚まではと老妻にはげまれ

原稿の樹目口ほどに埋められず

朝礼に立てば自嘲の明治調

「旅人」以後の

麻生路郎作品

15

三十五年三月号

不朽洞句帖

美智子妃ご安産を祝して

男子だが軍人などにならしやるな

相ついであやかり組も呱呱の声

ハワイ島のカポホの町へ徐々に近づく

熔岩の流れが、町を全滅させるおそれ

・選者交代の弁・

創刊号から満六年余担当してきた「川柳塔」の選を四月号から榊、多久志、生々庵と、一年交代にやる事になった。昨今生々庵の身辺がますます煩雑になってきた事と、周囲の人達が生々庵の健康を気遣うてくれた事が主な理由である。誌上に新鮮な空気が導き入れられる事は俗な言葉でいえば一挙兩得というもので皆様も大いに期待して頂きたい。

中島生々庵

があるとの報道に、戦りつを感じて
ころまで流すまいぞよカポホ町

安保条約改正の批准が寸前に迫まる

やがて徴兵母のなげきが近づくか

わかつてはいても策なき世なりけり

社会党忠治も次郎長も居ず

次の二句、本号に載っていないが二十
九年十二月、豆秋氏還暦祝賀句会にて

「素顔」

素顔しか持合さないう学者なり

素顔だが仏に近い顔を持ち

南海電鉄川柳会「只乗り」

家出して薩摩の守で上京し

只乗りをしたのをチンピラ手柄にし
顔で乗る小ボスズボンに下駄を履き

(馬 静 島 傍)

川傍柳 初篇研究

(百四)

前田喜代人 川端柳風
故
岡崎重義 高須啞三味
清博美丸 十府
藤井和雄 岡田甫

622 ほんほりの跡から碁盤持つて出る

一 甫

高須 友人が来て、一応挨拶やら用件がすんでから、碁を打とうということになったが、もう日が暮れかけている。「おい、あかりを用意しろ」というので、ボンボリを出してもらったあとから「碁盤を持つて出る」という句で、別に特定の人の場合はないと思う。現代のように、日が暮れたら電気をひねる時代とは違うから……。但しこの句、熊さん、八さんの句ではない。雪洞といえはあまりシモザマの灯火ではない。相当の家（武士階級？）と思う。

丸 贊。「ほんほり」とあるから、藤井説のような情景と見る。

岡田 贊。

623 下女がせなかますをおろし腰をかけ

水 砥

高須 下女がせなはすでに何度か既出。この兄貴、村から何かカマスに入れて持ってきたので、まず「おろしたカマスに腰をかけ」て一休み（一服）してから、挨拶やら用向きにとりかかろうというわけ。

大ていは馬をひいて来るので、馬からカマスをおろしてか。

前田 贊。

塗下駄をいただいてせな腰をかけ

七・41

高須 日待ちについては日の出を待つすなわち日の出を拝む行事ということが伝わっているが、その日取りは正月十五日、十月五日または正五九の三・十三・十七・

前田 贊。

塗下駄をいただいてせな腰をかけ

七・41

二十三・二十七日などいろいろ説があつて

ハッキリしない。ただ一族または一部落の者が一方所に寄り合つて、日の出を拝む信仰形式の一つということではあるが、それがある地方の一行事として相当みだりがましいものになつてゐるところがある。そこでその翌日、片方の下駄を持つて馳走になつた礼やら、無作法の礼やら言ひに行つたという句で、昨夜のランチ騒ぎを想像できよう。

村日待ち膳が取れるとござを出し 七・7
ござがこの村の唯一の芸人というわけ。

日得ちの夜馬鹿と壺とが残るなり

馬鹿ツ花と丁半、すなわちバクチ連中だけが残つた。日待ちというのはそういう夜でもあつたわけ。

岡崎 早朝散会するので、履物が見分かれず、片方履き間違えて帰つていたのである。

丸 贊。

岡田 贊。間違つて履いていったのは、酔っぱらつたからだ。

625 珠数さら／＼とおしもんで後家だまし

魚 弓

高須 後家の句というところ、どうも色っぽい句が多いのは、男を一度知つたという感じが、相手に何となくそう思わせるためであ

らう。

後家の髪この世で使う程はおき 二三・9
で、誘う水あらばの風情がどうもなやましい。で、三七日から一周忌と仏事にかこつけて、和尚様すこし小マメすぎると思つたら、仏様より赤い信女が目あてであつたという句だが、この「珠数さらさらとおしんで」は謡曲「舟弁慶」の文句とり。

前田 贊。
珠数を下げてどここやらが色師めき

二〇・25

岡崎 贊。

若後家はいかい功德とくどかれる

若後家をすすめて和尚法に入れ 末一・15
清 贊。まともな話をするような恰好で、

実は……。

藤井 贊。「さらさらと押しもんで」で殊

勝な和尚振りを示し、内実はのふくみをもっている。「どここやらが色師めき」より佳句。

丸 岡田 贊。

626 ころびがだいやで三味線ハ引きり

一 甫

高須 言葉のキリ目がよく判らず、不解。転びがだ、いやで、三味線は引ききり、として上五が判らぬ。三味線は弾くだけで、

転びはおことわりと、深川の芸者の句かとも思うが……。

前田 〃「ころびがだ」がわからぬ。だは不要でころびがなら前説の解になる。解し得ない。

岡崎 踊り子だらうが、わからない。

清 〃「だいや」は本職の意。「引きり」は余技の意である。すなわち主題句は、踊子を詠んだもので、本職がころびで三味線は余技であるとの意。

三味線は付けたりころびだいや也 七・21
という類句もある。なお「だいや」「引きり」については、額原退蔵著「川柳雑俳用語考」に難語として取り扱われているから参照されし。

藤井 〃小生も「だいや」「引きり」で苦労した。川柳大辞典で了解できました。

川端 〃「だいや」「引きり」敬服。句意贊。

丸 贊。
百番の内でだいやハ浅草寺 宝一〇・義2
浅草とだいやにおがむ古かわで宝一二・3

岡田 〃同。清氏の勉強ぶりに敬服。

岡田 甫 著

「川柳東海道」 (上)

・好評発売中・

定価六五〇円
送料一〇円

天皇さまと海老のシッポ

東野 大八

「ひゃあ、これは珍らしい」

私は紙魚の穴だらけの、その半折をひろげて、つい奇声を発してしまった。

久しく手をつけないままの納戸の古本の山から、分解されてバラバラになっている古アルバムを、つい開けてみたときの私の奇声である。半折はそこから出た

「至誠 天皇第十四世熊沢寛道」

と書いてある。まるですり切れた秋葉神社のお札のようなひねこびれた字体である。くるくると無造作に巻いて、そのままべちゃんこにくつついたままの、厚紙一枚状のそれを展げたので、まるで洗濯板に書いた文字のようにそれはひどく屈折して見える。

私はその文字に見入っているうち、あの日のことが昨日のように甦ってきた。いまから二十四年もむかしのその日の一コマである。

私が大陸から引きあげてきて、最初にありついていた四国は今治のさる日刊新聞社の一室であつた。

この日、八字ヒゲにハゲ頭の紋つき羽織の

おかしな男が、背広蝶ネクタイのお伴を二人も随え颯爽と社の玄関口から入ってきたのである。さては右翼か、と私の横にいる気の小さい編集長がバネ仕掛の人形みたいにイスからとび上ったのを覚えている。

間もなくその不審な三人の来客と別室に消えた編集長が、私をその部屋にさし招いて

「熊沢センセイだよ」

としゃちこばっていった。坐ったままの紋つき男は、応揚にかたえの金淵眼鏡にアゴをしやくつた。心得て彼はでっかい名刺をうやうやしく私の前にさし出した。

「神武天皇第十四代大延天皇熊沢寛道」
墨字トッパンのその字面は、正月にやってくる天照大神のお札とそっくりであった。

（ああ、これがいまウワサに高い熊沢天皇か）

私は合点して座につきながら入念に観察した。ハゲ上つてつやつやとした広い額、丸っこい愛嬌たっぷりな鼻、そして粘土にぐいんと黒豆二つを指先で押しこんだような黒い奥

眼。八字ヒゲはまばらで、ムリをしてたてましたと口のあたりでつぶやいてもいそうなほど。天皇さまにしてはおそろしく品位もなければ威厳もない。かえって傍のモーニング風に、ひげのそり跡も青々としたチョビヒゲの方が迫力がある。一見学校の教頭風。いま一人の金ぶちの方は、気の弱そうなしよぼしよぼ眼の、まあこれは使い走りのモダン三太夫でところか。

熊沢天皇は、南朝正皇論を語ったが、しゃべり方はうまくない。むしろ侍従長格ともみえる教員風の方が堂々としていて、説得力がある。話の真打はこの方で、長講一席だ。

熊沢家は、大むかしから男子は十六花卉の菊花紋章、女子は桐花紋章で分家は十二花卉を用いた、と熊沢天皇の着用した羽二重の紋つきについて説明もした。時折、エヘンとセキばらしいしながら、天皇は易々だぐだぐとこのおつきのつまむ菊の紋章をなすがままに任せ、自らが侍従長？のとうとうたる快弁にききはれる。

「現天皇は六百年前、暗殺されたものの子孫で、正統な皇位は私である。すなわち後龜山天皇十八代の直系の後えいで、私は南朝の正統であります」

おつきの話のあと、彼はこうしめくくったのである。ヒルどきに当たったので、社では天どんを御馳走したが、そのご培食の栄を賜った私に、彼は携えてきた半折の一枚を恭々しくとり出したのである。紙魚だらけで現われた眼の前一流れが即ちそのときのしろもの

なのである。

この汚ないシミだらけの半折の出たアルバムから、その際の記事の切り抜きとメモ帖も現われた。黄色いその湿った紙片には、ヘタな私の川柳も数句ついている。その内の一句「天皇へエビの尻尾もおかしそう」以下、そのメモ帖等を参考にしての一席。

熊沢天皇は二十一年七月「終戦後といえども皇室に對し不敬である」と国会は決議したが、進駐軍はこれに對して「皇室への侮辱ではない」との決論を下した。ために「マツカ―サーこそ日本に送られた大使である」と熊沢天皇はそう記者団に感想を述べられた。

この一件で熊沢天皇は全盛期を迎えた。「南朝奉戴國民同盟」が結成され、会員は全國に三千人とある。天皇と名乗る以上、皇居が必要である。南朝ゆかりの吉野山にその敷地を求め、吉野大内山に千坪の土地を買入れ皇居造営にかかろうとした。ところがもう一人の天皇が出現した。竹原天皇である。

これではわが皇室の「尊嚴」にかかわると熊沢天皇は、南北朝時代の史学の權威流川政次郎京大教授に鑑定を依頼した。ところが竹原天皇どころか熊沢天皇も天皇にあらずと公表した。おまけに岐阜県神岡町に銅山の破区を持っていた彼は、当時の金で一万八千円の税金滞納をやらかし差押えを食うという追い打ちの目にあつた。彼の落目がここに始つた。

「天皇を税務署が差し押さえるなどという

不敬は、日本二千六百年の歴史にもない」と記者団に大マジメで発表したことから、なかなかオモロイおつさんや、と世間はどうとう彼をビエロ扱いにしました。そのヤユ嘲笑に對し、尊嚴回復のため參議院に出馬したが惨敗。おまけに愛知県津島市から、二十九になる青年が、こちらこそ正統の熊沢天皇であると名乗りをあげた。熊沢天皇そのものにもニセ者と本モノの二人が出現したわけである。ところが、岐阜県からも熊沢常という婆さんが、私こそ熊沢天皇の直系であるといひ出し、話はますますこんがらがつてきた。熊沢宮廷まさに風雲急。

熊沢天皇も三人が飛出すと、とたんに変なもので天皇ブームが各所にまき起つたのである。すなわち熊本から國憲天皇。鹿児島から長沢天皇。岡山から酒本天皇。福島から松本天皇とここにニセ天皇の空前的ラッシュが現出し、印ばんでんの天皇まで入れてして十二人。まさに一ダースなら安くなる——という当時の映画の題名を地で行く始末である。

こうした正統なる皇室への侮辱に、熊沢天皇はついに、ノルカそるか、皇運を賭しての決戦に出た。二十六年二月「天皇不確認確認の訴え」を東京地裁に出した。もちろん一発で却下である。その理由とはこうだ。

「天皇裁判も可能であるが、法の目的たる秩序維持の観念からすれば、動揺と破壊をもたらすものとして否定すべきである」

かくして熊沢天皇の破滅のときがきた。大阪の仮皇居であつた辰巳屋という料亭で、息

子がヤクザと出入りをおっぱじめ、そのとばつちりで天皇も身にハカ所の傷を負つた。とんだ承久・保元の乱と申すべきである。

天皇はかくして身すりたがったため劇場のアトラクションに出たりしたが、ついにモノにならず、結局天理教の雑用係に落ち、果ては窮死していったのである。侍従をつれ全国遊説で大名旅行をつづけ、ろばまで作つた挙句の裁判提訴の数々、一体これらの費用はだれが負担したのか、今となつては世の物好き連中の遊び半分のパトロン気取り、としか思ひようがない。

私はいま、そのかつての日の熊沢天皇の華やかなりしころの御筆先を前にして、それを貰つた日の、空っぽの天どのをはちを生々しく思ひうかべる。天皇が残していったそのどんぶりには、小さなエビのシッポがポツンと一つだけ残っていたのであつた。

昭和二十五年三月、四国巡幸の現天皇さまに隨行して、四日間の取材旅行を行なつたのだが、熊沢天皇の直後だけに一種の感無量さのうちに、その旅をつづけたことを思ひうかべる私だが、なぜか今はニセものの天皇の方に、一種の親しみを覚えて仕方がないのである。

東野大八氏から (一三六宛に)

「前略。桐の箱、勲章かと思つたら川柳塔のバッジだった。バッジはどれもつけたことはないが、生まれてはじめて趣味のバッジをつけたわけ、永久につけて歩きます。」

昭和47年1月10日

川柳山陽新幹線に試乗

山田季賛

話さぬ間に過ぎる。

一番難関着工に遅れた阪神三市の尼崎市内へはいり、十分もせぬ内に、六甲トンネルへと走り込む。六甲トンネルは少々道床が不整備か電車がすこし上下動する。湧水の苦労話もつかの間、新神戸駅へも通過。又トンネルへ入る。神戸トンネルである。

二つ三つトンネルを過ぎると西神戸の保安基地が右下の車窓に見えるかと思う内に、西明石通過となる。

ここ播州平野から備前平野へ真しぐらに西下する。姫路軌道基地を過ぎると市川橋梁となり、車窓の右遠方に姫路城が浮いている。

姫路駅通過、ここから西には大小さまざまなトンネルと橋がある。いろいろ話に熱中している内に相生駅はすでに過ぎて、後数分にして、岡山駅となるのである。

十四時十分岡山駅定刻にホームへすべり込

んだので、一応この電車は車庫へ入るとのことだ。下車をして、岡山駅前の地下街で喫茶店「白桃」で川柳人のお茶の会となった。帰りは岡山駅十五時十五分臨試電四〇四Aの試乗員として乗り込み、定刻に岡山を発車、車中では、川柳の話に花が咲いたので時間が実に短かく感じた。

新大阪（折返し点）へ十六時三十五分到着後は、現在使用中の引上線車庫の構内を案内説明をして十七時過ぎ新大阪工事にへ戻り、元の服装にかえって、新大阪駅構内の美々卵で夕食後解散した。

大阪府岡山市

不二田一三夫

新年句会の日、季賛さんから、

「川柳を山陽新幹線に試乗させたい」とのお誘いがあった。

「これはおもしろい、三月号の特ダネになるね。だがボクは朝起きに弱いんだ」

「十二時半なら、どう？」

本社へ毎日顔を出すのが十四時半だから、新幹線とデパートする日は二時間早く起きなければならぬ。

Aひかりは新神戸・姫路に停車して一時間八分。Bひかりは新神戸・西明石・姫路・相生に停車、一時間十七分の所要時間だ。Wひ

山陽新幹線「新大阪—岡山間」は、三月十五日開業の運びとなる。総工費は約二三〇〇億円、昭和四十二年三月十六日帆船トンネルでの工事の第一楯以来まる五年ぶりに東京の風をはらんだ「アイボリーホワイト・ブルー」の電車が早春の山陽路を走りぬけるのだ。すでに昨年八月三十一日に東海道新幹線とドッキングし、各種設備のテストも終わり、十一月より本格的な練習運転が行なわれていた。また岡山—博多間も五十年開業をめざして十一月に着工された。

一月十日十二時三十分、不二田一三夫、西田柳宏子、傍島静馬諸氏とぼくは新大阪駅地下鉄中央改札前に集合、まず大阪新幹線工事も新大阪工事に寄り、服装を整え、新幹線の丸朝腕章をつけ、十二時五十分新大阪駅（折返し点）発の試乗員となる。臨試電四〇三Aは定刻に滑りだす。

新大阪工区担当の神崎川までは何も

かりはノン・ストップ・五十八分で岡山へ着いてしまう。

季賛、柳宏子、静馬三氏とボク、写真のようなスタイルで五十八分車に乗り込む。

路郎先生と岡山はインネン浅からぬものがあり、岡山の川柳の今日あるは路郎先生の財産だと思う。だが後年、一部の柳人と感情的なもつれから冷戦状態がつづいた。これを當時不朽洞会理事長だった生々庵主幹が必死で和解させるため努力されたものである。



右から静馬、一三夫、柳宏子、季賛諸氏（新大阪駅で）

川柳塔になってからは、路郎先生の財産を守るため、いち早く岡山の川柳人に手をのばし、一路集の選者に故十九平氏や恵二朗氏に編集部がお願いしたものだ。これは生々庵主幹のご意志を継いだつもりでいる。（福島鉄児氏の隠れた運動もあった）

さて、ベンがレールからそれたようだが、本題をこいらいで軌道に乗せよう。

三月十五日に開業する山陽新幹線へひと足さきに乗せてもらえたのは光栄だった。

民営鉄道三番目の免許が「山陽線」におりたのは明治二十一年一月四日だった。

初代社長は故藤原あき氏の父、中上川彦次郎氏で、当時は「車掌」のことを「車長」と呼んでいたが、氏は「車掌」という新語をつくり、今日に及んでいるのである。

「赤帽」制度（明治二十九年）や、列車にボーイを乗せ「列車ボーイ」を登場させたのも「山陽線」が最初である。

食堂車を走らせたのも国鉄より二年も早かった。（明治三十二年五月）

当時の客車は「ゴザ式」だったが、この食堂車は「イス式」。カレージが十五銭、コーヒーが五銭、パン三銭というメニューだ。

「特急列車」を走らせたのも「山陽線」が文字どおりハシリだった。（明治三十六年一月）

この鉄道界のトップを走りつづけた「山陽線」も、明治三十九年十二月一日、日本国有鉄道法によって国鉄に買収されたのである。

（サンケイ新聞）

「すこしゆれるが、運転の前部と後部の方はやむ得ないです」と季賛氏。

レールをささえている柱は、地下二十五メートルとはいっているのだそう。皆さんたいへんな仕事だと思った。

工事現場の助役さんとしての季賛氏の説明を聞いているまに「岡山駅」着だ。

「え？もう岡山へ着いたの」と静馬氏。

「なるほどね、これなら「ちよつと岡山の句会へ」という実感がわいてきた」と柳宏子氏も驚く。

きつちり五十八分で新大阪―岡山。さすがに時間の正確さは世界一の国鉄さんだ。延長一六〇キロのうち三五％までがトンネルという山陽新幹線を「もぐら新幹線」とは愉快なニックネームだと思った。

十六輛、四百メートルをななめ横から見ると「銀色の蛇」のよう。三人掛け、二人掛けが二十、一輛百人乗りの客車へわずかに四人で貸し切りにする豪勢さだ。そしてほかに十何輛が空車という、まるで「お召列車」だ。

「さあ、ここで句会をやろう」

「山陽新幹線句会だね」



左から静馬、一三夫、柳宏子諸氏（岡山駅前で）

柳宏子「一年三百六

十五日を上まわる
三百八十回ほどだ
ったかなあ」

季賛「一日、五回と

いう日もあったね
出席名簿に署名し
て句を出し、つき
つきと句会を走り
まわった」

一三夫「ボクは本社
の句会だけ。どこ
へも行かない」

柳宏子「一三夫さん
は量より質でいく

人だ」

一三夫「いやー不熱心なんだ。さあ、句がで
きたら、出していただく」

全員「超特急で作ったから、いい句がないけ
どカンペンしてもらおう」

季賛助役の案内で、新大阪駅構内のゴミを
焼く室など見学、新聞社の発送部ほどの古新

聞の山や、週刊誌の山に目を丸くする。

「今、同僚の一部は九州へ行っている。岡山
から九州まで、このレールがつづくのです」

と、国鉄マン季賛氏の眉がピリリと動くのを
見た。

山陽新幹線試乗句会

山田 季賛

試運転 苦労話へ花が咲き

空気を運ぶのは楽しいという試乗

トンネルの水 飲料によいという

出れば駅 すぎればトンネル早や神戸

直結道床トンネル内をよく響き

西明石過ぎれば平野 海少し見え

直結軌道早くも公害音でもめ

走る下 まだ未解決のある用地

岡山の地下街まで川柳持つて行き

西田 柳宏子

海の景欲しいナ山陽新幹線

裏ばなし聞きつつ試乗車に揺られ

新幹線試乗 腕章ヘルメット

傍島 静馬

作業衣になっても国鉄マンには見え

作業衣になったが七十の及び腰

岡山のコーヒ新幹線で飲みに行き

作業衣を脱げば折れそな優さ男

不二田 一三夫

国鉄の新スター山陽新幹線

トンネル トンネル もぐら山陽新幹線

銀色のひかり一閃 山を抜け

五十八分で ここ大阪府岡山市

（カメラ 季賛・柳宏子）

（一月二十八日、生々庵主幹、季賛、薫風、
与呂志諸氏も試乗）

近 詠

須坂市 高峰 柳児

情報をつかまれ弱身の薄笑い

筋通すかたくなそろばんすぐ弾き

胸を張る虚勢はねかえされ慌て

早寝早起きも反骨にされている

大洲市 米沢 暁明

看護婦の魅力は助手のメス裁き

勝算を問えば答えずピケを張り

案内がなければないで腹が立ち

プロポーズお受けする気の瞳がきれい

今治市 月原 宵明

ソーダ水一ツの距離の純喫茶

天気図は西高東低布団敷く

共産党だったがお金ができて保守

銀行は素気なく手形返却し

どうせ駄目なので理由をドル・ショック

しがみつく花を盆栽うれしがり 岐阜市 市川 鱗魚

離農した臉に母が麦を踏み

我が党の話故郷はさからわず

こんな墓建てて欲しいと墓参り

少しでも命貯める気歩く会 今治市 長野 文庫

いづれ要る喪服狙われてるわたし

故人とは同い年です声うつる

ぶつとりと切れよと希う命の灯

札束を

高 鷲 亜 鈍

札束を覗かせながら蹤いてこい

憂鬱の日は敬老の日のテレビ

若さには勝てぬ惨めなお座敷着

若い妓に勝てず白毛を悔しがる

肩凝らす三味線弾を揉んでやり

階段のお膳運びに泣く後遺症

さようなら男きらいにつく女

聲音の冷い感じ涙をかむ

盲には盲の妻がいつそ欲しい

明暗を貫く愛の電話欲し

騙されても盲 女の恋のひたむきな

女ありて花火のあとの闇を追い

自主性のない女は理性的である

恋愛感情笛の音色に月が邪魔

初恋の人が点滅する夢路

精神的に愛した女こそ愛す

行脚して精神的な女おもう

鈴虫は鈴虫らしく夢に泣く

死んだ人と思えず楽しく遊ぶ夢の中

現在を脚色してる過去の夢

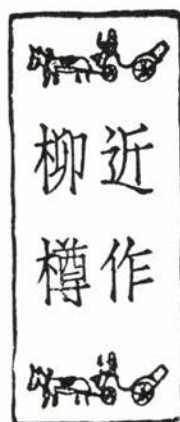
ヌードショウ女房を裸にした夢にみる

昨日今日の知己でてこない夢の人

盲目になって知った人には盲目のままの夢

秋の虫泣きやむころに冬便り

冬の山今年も待つか死の門出



川村好郎選

――長男誕生――

鳥取市 両 川 洋 々

洗たくも風呂も済ませて産気づき

二回目のお産は亭主だけあわて

本当に男か婦長へ念を押し

大臣になるやも知れぬ児が生まれ

戸籍課に來ても名前にまだ迷い

竹原市 三 宅 不 朽

寝ころんで亡父を思うのも新春

ふと能弁ころ見られしごと黙る

旅さびし襟を立てればなおさびし

降る雪のころの汚点あざやかに

陽うらら愁いなしとはいえざるも

大阪市 黒 田 真 砂

子の嗜好入れておせちも洋風化

嫁かせ度いゆかせ度くない気の焦り

妬く気にもなれず無言の茶を啜り

春を待つ心がはずむ試着室

三面鏡明日へ賭ける別の顔

島根県 神 原 秀 子

好きだから好きだといって逆らわず

裏切りをうけて仏になり切れず

許すこと未だ足りない掌を合わせ

心まで白く凍らす足の冷え

紅梅の蕾つぶらに待つ風情

島根県 堀 江 芳 子

薫風先生からセーターを拝受して

セーターへ恩師のぬくみひと抱く

正論へ胸張ったとて病衣かな

癒え試す庖丁にさえからかわれ

伸びた子に叱られるのも人生譜

和歌山市 樫 村 ふみよ

若返りにはいたズボンが身につかず

無い袖もふりたい孫がやって来る

遠い日も近くなる日もある夫婦

奥さんの知らぬのれんの顔なじみ

大阪市 阪 上 十 止 庵

駄犬にも誇りセールス通さない

男とて抜け毛佗びしく秋深む
子と親の自由へせまい2DK
僅かある夫権実印持ちつづけ

大阪市 白石 潔

点滴に合せるように鳴くちちろ
病室に独りはなやぐボインセチャ
元旦の病室テレビを付っ放し
お目出度う云いそびれている患者

八尾市 高杉 千歩

見渡せば幸せそうな人の群れ
音たてて賀状が春を告げにくる
日脚少しのびて片付け念がいり
法要の僧見送れば冬の雨

守口市 岸 本 豊平次

消火器の宣伝手頃な火事でやり
終電車仮面の取れたのも混り
言う方は冗談が身に突き刺さる
保険屋にあと何年と値踏みされ

岡山市 嘉数 千代香

断絶へ砦は音もなく崩れ
聖書めくる時血みどろの指である
亡母点となりて心の海に佇つ
云い訳けはすまい沈んだ角砂糖

和歌山県 南 木 宝 子

冷えきった手で愛をどう探そうか

ちぎれ雲もう逢うことのない別れ
むなしさをだれが癒してくれようか
思い出も捨てて女のはずむ声

島根県 錦 織 文 子

遠い子のかげ膳の神酒なみなみと
ぼたん雪心の色もそまるなら
わびしさは友情の灯りゆらぐ日の
無事と言う便りへも泣けて母

新宮市 川 上 久 司

ひと言も言わず会議の席を立ち
はよ帰ってほしい客にも茶をすすめ
事故現場助けるどころかカメラ向け
気休めの嘘まで信じている弱さ

藤井寺市 古 結 百 水

老妻の鼻しみじみと置き炬燵
それぞれの言い分除夜の鐘に捨て
三カ日過ぎれば去年の顔になり
四日目を待ち兼ねさっそく妻の愚痴

島根県 東 原 福 子

ハンディがかえってファイトかきたてる
墓まいり師走の中にあるゆとり
遅すぎた反省が負う深い傷
重い石抱いてるような気のつかれ

今治市 真 山 国 彦

馴れ合いのストで賃上げ値上げする

着ぶくれて押され始めの初詣
初詣パバ運ちゃんに甘んじる
字のうまい相手で返事書きそびれ

和歌山県 垂井 千寿子

リボンつけた小犬に家計簿あらされる
一尺のゆとりへ置きたいものばかり
ねずみのプライドへたは食べ残し
財布へは相談も無い料理本

和歌山県 ふきあげ 虎城

恋猫の道にも好みあるらしい
ネックレス胸のたぎりに踊らない
慰籍料の金策出来ぬまま切れず
実力の差を年輪としてひがみ

愛媛県 渡辺 都留逸

子に話す無駄を女房に言いきかせ
天気予報の合わぬを願う旅前夜
冬の夜のぬくさ仏説阿弥陀經
つづかない家計簿所詮足りぬから

大阪府 小谷 葉子

木枯しの窓にひとりの灯を温くめ
逢いに行く凍雨がとめるのもきかず
倅せがどこかに待っている夕陽
掌の中の波紋で愛は裁かれる

岡山県 山田 止水

正論へ俺の影だけついて来る
又めげる修繕賃を貰い兼ね

高知市 竹崎 寛

開運だ若さだ恋だ追い給え
リバイバル唄い疲れた声になり
まなじりを探り合わせねばならぬ愛

尼崎市 中谷 利美

ご家庭の事情どこにもある安堵
マンションの情事そしらぬ熱帯魚
子種ある証拠は妻に話されず

島根県 谷岡 芳枝

何もかも知る老松へ波すがる
つもごりの月へ子を呼び夫を呼び
そんな瞳で好きという気かつけまっげ

島根県 安達 潮音

国鉄はいいな赤字はすぐ補填
円高もよそごとに聞く隅に住み
病む妻をフト詩にして痛む胸

八尾市 高杉 力

主婦権の行使昼寝を欠かさない
ブラシだと知りつつもらいに行く粗品
明日乗る夜汽車の音を聴く下宿

大阪府 河原林 比呂路

白い雲に今日の望みを置いてみる
席順のどこかに汚職の匂いする

人生の半分妻におんぶされ

竹原市 脇

本 政 己

島根県 杵

みどり

薬屋根のつららに童話ぶらさがり
形身かも知れぬ着物を叔父がくれ
逆らわぬ妻をあわれなとも思い

新宮市 大

矢 富 子

松原市 玉

置 重 人

幸わせがこぼれ落ちそうそんな夜
最高の笑顔でいたい日が近く
嫁ぐ日へこんな事にもある笑顔

鳥取県 林

露 杖

大阪市 塩

満 敏

嫁がせて語らぬ妻と夜を寝る

脈をとる医師の瞳に眼がする
足音でわかるナースを待つ夜長

大洲市 堀

内 暁 風

大和郡山市 森

田 カズエ

背伸びしてももう届かぬと老いを知る
会者定離人は近くもの花も散る
神様も驚くような願いごと

氷見市 関

美 子

東大阪市 落

合 思 月

道よぎる猫がスリッパする寒さ
折り返すバスへ酒屋の灯が紅い
公害課さばき慣れてる受け答え

寝屋川市 福

富 隆 子

守口市 野

呂 杜 月

一年の躰正月バアにする

嬰兒とてストレス熱出してみせ

おさい 銭十円 甘栗二百円

紫の布団で富士の夢を見る

お前もか俺もと眠れぬ夜を語り
ふた晩目からの話題は遺産なり

釧路市 泉

きよし

腕組んでじゃまを承知の歩道橋
人並のラインをめざし踏むベダル
張本人かばう政治を指弾する

今治市 今井松花

アメリカンナイズ路傍の草に迄
ポルノ絵の盃出して又飲ませ
忘年会飲める女に挟まれて

今治市 原田輝親

冬雲の重さに喘ぐアドバルン
仮面落した蒼きこめかみ

沖繩返還

傷だらけでも良し娘連れ戻し

竹原市 楠美佐雄

万円の賽銭勿体なく眺め
風雪に耐える心の幹太し

竹原市 楠貞子

素直さに返れば相手も素直なり
広い目を開いて欲しい愚痴を聞く

榎原市 岩井本蔭棒

引退を待ち兼ねて居た拍手かも
血まみれの軍鶏が斗う世で平和

青森県 岩淵一星

本籍地年寄りだけで守られ
倒産も便乗をするドル・ショック

呉市 植田英詩

反論をする気老眼鏡拭う
ベテランの口癖初心忘れない

岡山県 武元柳子

美しい女に押されて初詣
若さ欲しおしゃべりにさえ疲れてき

松原市 守屋万竿

哀歎の果てなしネオンわれている
病む室を久し振りねと青い空

大阪市 藤田頂留子

保証人依頼親友とてそっぽ
写経する一字一字に澄む心

竹原市 簗田浄美

また一つベットが増えて一人っ娘
もう何も言えない涙に耐えている

竹原市 生信笑子

ふみしめてふみしめて麦育ちゆく
腕さしのべて貴方とのワルツ 春

鳥取市 近藤秋星

せめてものぜいたくみかん箱で買い
最愛の人に賀状が届いてず

大阪市 柳原静香

バーで飲む金は惜しまず出す男
つつがなく保険満期の通知来る

東京都 宮崎美津子

結局は子どもの云い分かれており

初仕事去年の歩みよみがえる

羽曳野市

大 峠 可 動

初春の雨人のころも重たかる

水仙の欠伸夕陽が蓋をする

河内長野市

井 上 喜 醉

コンピュータかけても解らぬ腹の底

ええ格好されて割勘後でとり

愛媛県

小 山 悠 泉

愛の詩記憶の中のお下げ髪

芽出度い日祝儀の出費言うとれず

米子市

石 垣 花 子

隠居の身尚印鑑がものを云い

しやちこばる方は男で見合すみ

新宮市

小 林 暢

行商のひと盛り売れてタバコ喫う

おこもりは行にも似たる小商い

大阪市

西 本 保 夫

すぐにまたあきらめムードの平社員

空想も楽し宿直の平社員

松山市

谷 の お

ヘドロの海恋の悩みは捨てられず

わが家はよいなお餅がふくらむよ

今治市

渡 辺 南 奉

連休の数を虚しくさせる職

正月も働く我れに陽がまぶし

泉佐野市

大 工 静 子

言い分も文句もあろう犬が吠え
ウインドで背の円みをちと延ばし

東大阪市

藤 田 飛 鳥

はかない夢心の隙間突っ走る

失恋をしてから優しくなった人

羽咋市

三 宅 ろ 亭

烏賊と鰯の香いを乗せてローカル線

菓子一つ残して寄合席を立ち

大阪市

平 井 露 芳

モーターが讃岐平野に色を添え

紙オシメしてますボクも旅の客

新潟県

高 野 不 二

拝観料取るから覗くだけで出る

国鉄が値上げキセル考える

弘前市

小山内 貞 男

敏感にさとした猫も生きる知恵

氷雪に風情を挑む福寿草

青森県

波 ただお

ニセ医師があちこちに出る福祉国

三日だけ富士が見られる文化国

豊橋市

鎮 浪 翠 月

咲いて散るみじかい命も春を待つ

只今の声を待ってた誕生日

新宮市

城 丹 鶴

手づくりの味噌汁ひと味違います
安いものないかと覗く十二月

鳥根県 安 達 小茶坊

みのる田に百姓秋を噛みしめる
さりげなく言った一言役にたち

新宮市 熊 野 溪 水

少しでもいい鏡よ嘘をついてくれ
コーヒーに今日の闘志を秘めて待つ

大阪市 堀 口 欣 一

蝙蝠のような民社が好きという
アイシヤドウあるかなきかの眼にもする

堺市 栗 本 藤 持

温い風ポーナスを伴れ町を抜け
子等の名が今年も増えた賀状来る

岩国市 村 井 西 合

人妻になって荷風を読みかえし
さし上げるころばかりは持ちあわせ

鳥取県 福 田 陽 山

今年こそと元気で握る力餅
子の心老妻の心のシミル年になり

鳥取市 有 田 鹿 子

餅の数減って初老の春寂し
帰省子の強くなりそな飲みっぷり

鳥取市 佐々木 静 泉

増やすコツ聞きたいねずみの年が明け

玄関をまたいで疑う構え解き

鳥取市 藤 本 恵 子

ふて寝する頑固へ腹の虫が鳴り
疑った子に清らかな瞳で見られ

鳥取市 藤 本 鎮 也

見舞品隣りへすまぬ程に積み
告げ口が逆の立場に追い込まれ

鳥取市 藤 本 和 宏

焼け跡の木立も春の芽を伸ばし
ばれたとも知らず告げ口よくしゃべり

鳥取市 藤 本 佳 女

焼け跡を鎮めるように雨は降り
小走りになって合わせる子の歩巾

今治市 大 本 バ ッ ト

ハネムーンさあ白地図を塗りましょう
脇役の酢で生かされるチリの味

今治市 伊 藤 一 郎

腰痛の予報明日は雨らしい
不景氣が記録破った初詣

高槻市 山 田 ス ミ 子

お正月子のチャンネルへ逆らわず
リモコンのオモチャへ父も居るお正月

大阪市 木 村 濁 水

大声で叱かる子もなき老の日々
除夜の鐘世界平和の音と聞く

大阪府 松岡進	大東市 広畑賛平	七尾市 松高秀峰	備前市 武内雅堂	仙台市 川村映輝	今治市 薦本昌道	大阪府 岡本まさひろ	島根県 岩田三和	松江市 興富喜子	大阪市 小谷清涼	兵庫県 高橋近江	山口県 栗井さちえ	関白も世のうつりには逆らえず
化粧にも念入りになる四十肩	老いかなし笑いも咳にさえぎられ	栄転へ皮肉も交じる酒の席	振り向けば振りむくほうへ背伸びする	愛される老人やっぱり金が要り	そつとして置くより他はない勝気	明治生まれ何処かに芯の強さ見せ	提案の本当の理由聞きもらし	お年賀のハガキに交る死の通知	物忘れ笑うた母のようになり	娘の心紫毛布と蕎麦枕		

宿毛市 山本窓花
除夜の鐘防空壕の日を思う

今治市 古野伶人

二十年振りの温くさに腰が伸び

大阪市 新川貞祐

竹簾のゆれは雀のゴーゴーか

大東市 岡部シゲ

葬列を見送り明日の我思う

大阪市 今井隼人

お年玉子供に貰う老いの坂

大阪市 村島秀村

忘年会話いっぱい腹いっぱい

大阪市 内藤ますゑ

家も足も口も値上げの波を聞く

大阪市 花田繁子

寝正月胃はきっちりと眼をさまし

神戸市 土井明日人

美容食実行しても年が出る

大阪市 公木右示

蹠跟として出るポルノ映画館

告 白

四月号から「近作柳樽」の選者が
菊沢小松園氏になります。

川柳塔社

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

西尾 栞

空虛感南京豆はかんの底

岩田 美代

誠に素晴らしい句で、既に一家を成して居られる作品である。句は人なりと申しますが、作者のお人柄を知っている私は、この句の出来たのも偶然ではないと思います。空虛感に對して、下の句がつかず離れずによくついています。兎角こういう句は、上五の言葉に對してセンチになったり、又つきすぎたりするものです。もう一度よみ返して柳味を味わいましょう。

街角に住んでサイレンほけとなり

吉田 圭井堂

川柳は言葉の連りでありますが、寸鉄人を刺す川柳であれば、單なる普通の言葉では所謂ピンときませんが、作者はサイレンほけ

という新しい言葉を創られて、一読笑いを誘われました。戦時中南方ぼけという言葉がありましたが、作者の会社のある大今里のあの街道筋でこそ、サイレンほけという適切な言葉が生れ得たものと感心しております。

裏へ回れば裏へ來てる犬

山内 静水

この句をよんで、何か意味づけたいと思う人があるかも知れないが、素直に犬の習性を詠った句として、裏へ回つて來た犬の頭の一つでも撫でている作者と犬を想像したいと思います。勿論この犬は尻尾をビヨコビヨコとふる可愛い仔犬でありましょう。

その先を言えば貴方が逃げそう

野坂つき子

もっと具体的に言つた方が、句の意味が強くなって良いと言う批評をよく言われる場合がありますが、この句のその先を言えといふ具体性のない言葉が、読む者をして八方に想像させ、その先を問ひ訊きたい衝動に駆られる成功した言葉であつて、尚下五の逃げうで、で止めた手腕もまた立派なものです。

はるばると柳葉魚は子持のまま焼かれ

高杉 鬼遊

柳葉魚は、ご存知でしょうが、シシヤモと読みます。姿は文字通り柳の葉の形で、北海

道の特産です。子持シシヤモが最高で、プチプチと歯の間で割れる味は一杯のあてに得も言われません、北海道からはるばると大都會へ來て子持のまま焼かれるのは、柳葉魚の運命であります。シシヤモは勿論アイヌ語です。

誕生の馬の額の白い星

橘 高 薫風

誕生した許りの、メンコイ仔馬の眉間の白い星の鮮やかなこと、作者独自の感覚です。

お日さまの他はむかつくことばかり

渡 辺 曉 童

There is nothing under the Sun という英語の諺があります。何時の世にも、太陽は最高です。お日さまという大きいものと、むかつくことばかりという俗語をもってきたところ、敬服致します。

継ぎ木して春 私にも萌ゆるもの

川 村 好 郎

脱病床を心からお喜び申上げます。それを継ぎ木と表現されたとは、流石流石と感心致しました。私にも萌ゆるものは誠に頼もしい。ご加餐を切にお祈りする。

八尾菜の花白浜一泊句会は三月十一日、十二日。詳細は二月号をご覧ください。会場は白浜温泉「大既荘」です。

近作柳櫛

秀句鑑賞

— 前月号から —

菊沢小松園

入知恵の指人形が動かない

嘉数千代香

入知恵の悲しさは神経の末梢へまで及ばない、一度齟齬を来たすともう行けない、すぐにも露顯する、されば動かない指人形と見たところなかなか面白い。

疑うて信じて夫婦の歴史なる

柳原静香

疑うては打ち消し、信じては疑う、この繰り返しのうちに夫婦生活のゆるぎない歴史が積み重ねられてゆく、長い過程を簡潔に纏め上げられた妙手を頂く。

三度まで堪える私になっていた

小谷葉子

句主を知ると知らぬでは句意の深淺にも関わる。三度はこの場合必ずしも数の意味で

はない、若い女性の堪えることと世の経験の多い年齢層の堪える事柄に大きな距離のあることも勿論だ、昔から堪えることを我が国では女性の美德とされて居たが、この句が過去型にされたことに行き届いた技巧の賢明さを見る。

もう父を画いては呉れぬ子の育ち

三宅不朽

ある過去に於ては少なくとも我が国では子は親の背を揉み肩を抱くものとされて居た、敗戦以来の日本は過去没了型になって今では反って美德の眼で見られるようにさえなった。時代は恐ろしいもので父の似顔を画くのは、物心もつかぬ束の間の子供の技になったとは淋しい現実だ。

ひと言を女ごころがききたがり

岩井西合

この場合の一と言が重大なのである、男も一生懸命世智に長けた煙幕を張る、女も必死に責任のある一と言が欲しいのである、なみなみならぬ風景が想像されて深刻さを感じる

母子家庭母の背をもむ子に育ち

松高秀峰

明治、大正の時代なら普通のありふれた平凡な行為も今では珍らしいものと見られるそこに見る時代の推移を母子家庭に当てられた適確さを執る。

人減らしする機械を人づくり

岡本まさひろ

機械が人に更わる時代である、必ずしもそれが人間の倅せに繋がらぬ処に悩みがある政治も機械も幸福に直結してこそ好ましいものだ。

贅沢な煙をたててサンマ焼く

熊野溪水

団地やアパートでは煙を出しての炊事は出来ない、電気や瓦斯のオープンで焦目の無いサンマを焼く、焔炉で煙りを立てて焼くうまいサンマはもう都会ではお目に掛れない、従来の何処でも見られた庶民の生活が今では反って贅沢になったのだ。

詩も歌もなし腹立てて掃く落葉

楠貞子

詩や歌になる落葉はハラハラと落ちて如何にも詩情そのものだが、掃いても掃いても落ちて来るのにはお手上げで歌どころでは決してない正に自然の暴威である。見通し易い日常の景観を注意ふかく繊細な神経で句にしたられたのは敬服する。

さりげなくいけて野菊の名をとどめ

榊みどり

無技巧の技巧か、一刷毛でさっと画いた水彩画の趣き、下五の上手さで生きた好例。

川柳五十三次 (十八)

富士野鞍馬

36 赤坂

御油、赤坂の間は、東海道で一番短い十六町(一・八キロ)である。その間の松並木は美しく、おそらく道中随一であろう。

「名所記」に「宿ごとに遊女あり、立並びて旅人をとどむ」と書かれ、

御油や赤坂吉田がなくば

何のよしみで江戸通ひ

という俗謡もうたわれた。また式亭三馬の狂歌に、

左右からひっぱりだこの奴らさ

足をひらひらにげる赤坂

というのがある。御油、赤坂の売女を「奴」——やつこ——といったようで、

赤坂は泊女まで奴なり

尚古(八〇三)

赤坂は奴なやつが客をとり

梅島(七二五)

赤坂は奴がいいとふって見せ横月七六八

赤坂で馬も度々抱つかれ

(武五二)

などと川柳になっている。また、麦飯が名物

だったのか、

赤坂へまりこをかけてうまくくひ

と鞠子のとろろ汁との洒落もあり、

蒲原(八〇三)

赤坂のしうち伊勢迄なぐさまれ(拾二五)

話題は伊勢路までもあったであろう。

37 藤川

赤坂から二里九丁(八・八キロ)。「膝栗毛」に、

「此内桐の木中柴をうちすぎ、山中にいたる。爰は麻のあみぶくろ、早縄などをあきなふなれば、北八、

みほとけの誓ひと見えて宝蔵寺

なむあみぶくろはここめいぶつ

かくて藤川にいたる。棒鼻の茶屋、軒ごとに生肴をつるし、大平皿鉢みせさきになら

べたてて、旅人のあしをとどむ。弥次郎兵衛

ゆで蛸のむらさきいろは軒毎に

ぶらりとさがる藤川の宿」とあり、広重もまた、山中の麻縄屋のところを絵にしている。

藤川辺は、紫麦(高野麦)の産地で、

ここも三河紫麦のかきつばた(舊蕪)

の句があり、川柳は、

藤川は紫麦の浪がうち

木卯(八〇二)

と詠んでいる。

次の岡崎までの間に、天文十一年(一五四二)織田信秀と今川義元が奮闘した古戦場、

小豆坂があつて、

小豆坂一粒えりの古戦場

虎山(二〇九五)

一粒えりの高名は小豆坂

木賀(二一六二)

小豆坂あんの如くに突きくづし

早川(八七二)

と狂句になっている。

38 岡崎

岡崎は、本多氏五万石の城下で、藤川から一里十八丁(五・九キロ)である。

「五万石でも岡崎様は、お城下(しろした)まで舟がつく

という小唄は、今でもよくうたわれている。

また川柳に、

京までにたった一ト所よい女郎

(安二礼三)

岡崎は女郎衆よりもよい俵 其笠(五九三)

と詠まれ、江戸時代の岡崎米は五斗俵で、丁寧なよい俵で包装してあった。「岡崎女郎衆」というのは、寛永(一六二四—一四四)頃

から江戸で流行した

岡崎女郎衆、岡崎女郎衆、岡崎女郎衆は
えい女郎衆、岡崎女郎衆はえい女郎衆
という小唄の文句である。この唄は単調な一
節切のものであったから、三味線の手ほどき
によくつかわれ

岡崎をへんな調子でひいている (九六)

岡崎を弾けばそばから母語り (一一三)

岡崎をひくはきのふの調子也恵々(三八五)

岡崎を子のひくほどは乳母もひき

岡崎を油かざりに弾て居る 市風(三八七)

岡崎をハツ乳でひいてしかられる (五三)

ハツ乳は猫皮上三味線

岡崎をあけて四文が本を買

ーめりやす本四文ー

などと川柳に詠まれているが、この唄も明治

にはすたつたようである。

徳川家康は、この岡崎城で、天文十一年

(一五四二) 十二月二十六日に生れたのである

。今にその産湯の井というのが残っている

。これも川柳に、

天上天下岡崎で御誕生

木寛(一〇四二)

大手前病院にて

堀口 塊人

一生々庵主幹宛にー

いたれりつくせりのごこんとくなる御手紙
を日夜けんけんふくようしてどうやら快手に
こぎつけました。

そして度々おみまい下さったことなど家内

岡崎の時からお手がよく廻り

馬鹿(四九三)

御勝利も初手は岡崎からの事

御勝利は岡崎からが御手初め

三の字を横縦にして御生国

と作られている。

岡崎の東南に針崎という所がある。その

一向宗勝覺寺の宗徒が、永禄六年(一五六

三) 徳川家に反抗して、世にいう針崎一撥を

起した。

針崎一撥糸をひく御注進よしは(二六二六)

針崎の一撥主君をめどに取り

という川柳がある。

岡崎城下へ西からの入口に、有名な矢矧橋

がある。長さ二百八間、推古二十年(六一

二) 百濟(くだら)人が架設したといわれ、

弓形りにそった矢はぎの御橋也

名を聞くと長者のかけた橋のやう

と話しながら心で涙しております。言葉では

つくせませんが厚く御礼申し上げます。

すねてみたとて安静にするばかり

今秋句碑建立

尼 緑之助

路郎賞の栄に浴した

一三三夫宛にー

御生国橋も長者の名が残り 簡重(六五九)

武に猛く橋も矢を引く御生国 個(一四一九)

矢矧の橋も弓破魔が渡り初

などと川柳に詠まれている。

この橋の上に、秀吉の幼時日吉丸が寝てい

た時、蜂須賀正勝に出会ったと伝えられ、

狼が寝ていると橋番初手はいい

また藤吉郎になってから、この橋上で易者に

出合い、天下を握る相があるといわれて、そ

れから信長に仕えた。という話もある。

手の筋を見ても尾張へ道を換え(二三八)

その時の易者が後の安国寺恵瓊で、「あんな

男が天下をとるとは易なんかあてにならん」

と、易の道具を矢矧川へ投げこんだとも伝え

られて、

橋の上天眼鏡をほうり出し升丸(二四五五)

手の筋の掘出物は安国寺 三箱(一三三三)

と詠まれている。

矢矧橋中心の話題は多く、広重の絵もこの

橋を描いている。

灯台の夕陽 神話を抱きよせる

が、今秋、日御碕に句碑を建てていただく

ことになりました。おこがましい次第ですが

皆さんの御好意に従うことにいたしました。

生々庵主幹にもその時にはぜひ御臨席を御願

いしたいと思っております。皆様にもよろし

くお願いいたします。

一三三夫宛にー

御生国橋も長者の名が残り 簡重(六五九)

武に猛く橋も矢を引く御生国 個(一四一九)

矢矧の橋も弓破魔が渡り初

などと川柳に詠まれている。

この橋の上に、秀吉の幼時日吉丸が寝てい

た時、蜂須賀正勝に出会ったと伝えられ、

狼が寝ていると橋番初手はいい

また藤吉郎になってから、この橋上で易者に

出合い、天下を握る相があるといわれて、そ

れから信長に仕えた。という話もある。

手の筋を見ても尾張へ道を換え(二三八)

その時の易者が後の安国寺恵瓊で、「あんな

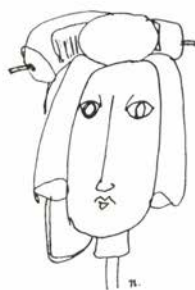
男が天下をとるとは易なんかあてにならん」

と、易の道具を矢矧川へ投げこんだとも伝え

られて、

橋の上天眼鏡をほうり出し升丸(二四五五)

手の筋の掘出物は安国寺 三箱(一三三三)



女流作家ベストテン

正本水客

女流作家ベストテンを選んで原稿紙10枚ほどにまとめて欲しいという葉書が編集部から舞い込んだ。句を選ぶなら兎も角、句主を選ぶとなれば個人的な面識などがなければ、なかなかむづかしい問題だと思いが止むを得ないので、ここでは昨年の一月号から今年の一月号までの川柳塔誌上における作句活動だけに拠ることとした。先ず川柳塔欄と近作柳樽欄で心引かれた句を慎重にチェックして、それを個人別に拾い出した。古豪、新人等のことは一切無視、選ばれた句は平等に一票を持つものとして、句数の多い上位10人の作家を眼をふさいで選ぶこととした。勿論、異論もあることと思うが異議申立は無理なことを注文した編集部宛にお願いしたい。

▽八 木 千 代

この作者の句は冬にさからって花ひらく寒牡丹とも云おうか。

ひとことの余韻に女賭けてみる
残り火のくすぶりいとしいものと抱く
久々の素足へ女たかぶって

心の灯消すまい風に身構える
ひとりの灯待つ夜ひそかな恋に似て
能面の下に炎えるもの見せず
静かに美しく燃える情緒に完成された女を見せられる。

娘を離すひとのころを忘れまい
なかなかデートせぬ子で氣を揉ませ
姑となるころをせめて地味に結う
口笛を子が吹いている久振り
里帰りあくびの所作も少女めく
燃えぬまま伴侶をきめる娘がかわれ
反面において人の子の親としてのこまやかな心使いを示す句も多い。

虹を見た日から変えない散歩道
アドレスを消す指先も泣きかける
メニューさえまちまち仲間だけの会
還暦の誇りはベンが錆びていず
濡れた手のまま乾杯へ妻も出る
白い杖風の動きにふと止まり
何気ない素直な句もまた作者の半面である。

▽堀 江 芳 子

この一年は闘病と病後の静養に明け暮れた年であったが、その間川柳への情熱をいさかも失わなかったのは尊い。句風は香り高い紅茶をおもう、ミルクをたっぷり入れて。

この夫へ生きねばならぬ注射打つ
どやどやと来て疲れさす見舞客
酸素吸うベッド見つめる子へ詫びて
口重い主治医にまたも聞きそびれ
また誰か看護婦さんの走る音
つらい病院生活のなかにも夫や子供に対する思いを絶やさない。

爪切って生きる喜びかみしめる
これわ物のように退院とり巻かれ
桐下駄を鳴らしてみたい病みあがり
いい着物欲しくないととき女病む
命再びわが家の豊しさと踏む
静養の目に小走りの割烹着
病めばなお夫婦のぬくみ子のぬくみ
恢復期にはいつて押えられていた川柳眼が
盛り上るように生きてくるのがみえる。
愚痴みんな吸ってくれそう月あかり
美しい花びらにさえ裏表
天高し布団叩けば音が澄み
澄みきつた義眼欺く光り持つ
病気を離れた句が生れてくれば戦後も終りである。

▽小 出 智 子

この人の句に私は何故かリングの花をおもう、そしてひそかな香りをおもう。

鳥籠のせめて青空見える窓

悔を重ねて女は過去にしがみつゝ

自問自答素直な女になつておく

日日好日友の不幸が氣にかかり

かかる時嘘にも女すくわれる

古い日記を読むひとときの交響詩

心の美しさが読む人を和ませて呉れる。

読みさしの本を開くも松の内

四五年も前より派手な柄を選り

夕曲にわが残り火をたぎらせる

慎ましいくらしが馬鹿に思える日

何事もうまく行く日の虫の声

心貧しき秋の夜の洗髪

自己反省的な鋭さを持つ句も見逃せない。

財布満して女は何を企める

観劇のみんな苦のない顔に見え

男の隙はバックミラーを覗くとき

読書よりすべなき父が哀れとも

また地に足をつけた観察力も秘めている。

▽小 谷 葉 子

手をのばせば届きそうで、それでいて遙かに

遠い夜空にある冬のオリオン星座のひかり

か。

地の果ての小さいいちさい塔きずく

青い果実心にそっと持ち歩く

朱のソファ ロマンがわいてくるごとし

旅路遙か心の地図を買いに出る

うすいうすいガラス色のロマンをおもう

才女に遠く好みの柄を選る

けつきよくは一人となつて廻り道

俸せな女の瞳振りむかず

美しい波紋残して悪女です

夏帯に胸の炎をたたみ込む

バックミラーに寂しい女は 私か

ともかくも片道の恋に灯をともし

鏡に写らわ悔いを胸にたたむ

愛の鍵別れの鍵を人は持ち

コインロッカーへ陰謀をあずけおく

シエーカーの冷めたさ心見透され

冷徹なまでのおぶなを心の奥へおくり込んでくる句がならぶ。

▽岩 田 美 代

あおい水をバックに、しっかりと根をおろした

花菖蒲のように胸を張る。

妬く事を忘れた顔の濁き見る

おだて今日すなおに受けて切る自腹

春めいて孤独とやらが嫌になり

愛ひとつ未完にするから美しい

俸せな友で女でありすぎる

救いのような沈黙に雨の音

錦絵に見るような完成されたやわらぎを感じさせる。

境界のない道だから急ぐまい

ゆるしがたいボーズのひとつ懐手

今日だけはネジ巻かれても踊るまい

合掌と書いて寺から寄附便り

法話すみ貧しい心にかえるとき

さとう壺にはまつて蟻は呆けている

向う様の都合が私を歓迎し

言葉の貧補うために笑つてく

反面において批判精神の確さも見逃せない

むしろこの方面が句主の本領であるかも知

れない。

▽野 坂 つ き 子

大つぶの石垣いちご、眼にしみる赤い色、

ミルク抜きで心ゆくまで独りで食べてみたい

そんなムードの句。

想い出が呼ぶから振り向かない私

コーヒーカーキ女のぐちはまだ続き

廻り道するには月が細すぎる

充ちたりているから噂気にならず

いつまでも歩いていたいのも女

端的に喋って恋を寄せつけず

たまに逢う恋は指先まで喋り

サンガラスかけて逃避をしたつもり

保育園ホームソングで昼寝です

若々しい楽しさにあふれていて好ましい。

意志表示すれば傷つく人がいる

絵の中の煙突公害には見え

黄銅六角ボルトナット

及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所

会社

大阪市天王寺区空堀町八番地

TEL 06 3452114

夜間 06 44008

焦点を持たぬ女の細い指

いつわりの微笑瞳が笑わない
久しぶり虹を見つけて救われる

オブラートに包んで風刺もわすれていない
人である。

▽山川阿茶

かたちのいい岩の上にしつかり根をおろした五葉松、紅の蔦がからんでいるのは知る人ぞ知る。

菊日和 留守番同士の長電話
不用品金に換算して捨てる
ご破算に願ひまして又離婚

お若い声ですがと電話念おされ
スベアーのない人生を書きつぶし
埋み火で焼くかき餅は禅めいて
鯉轍アクロバットもしてみせる

桜散ってもホームコタツをそのまんま

サンキューじゃ札を云われた気になれず
呱呱の声約束ことを背負わされ

年輪を思わせる句はいささかも隙を見せない。

地下道を死場所にして秋の蝶

蟬時雨みどりの朝を神詣り

駐車場のエンマこおろぎ轢れるな

静かに自然を見詰める一と時もわすれない
人である。

▽神原秀子

庭の見える部屋に敷かれた青畳の香りと落
着き、人影は見当らない。

金泥を流して湖と陽の別れ

麦笛を吹く子もなくて夕暮れる

梅雨晴れへ庭師の缺よく響き
ケロケロと蛙 蛙で思うこと

庭師の手借りれば石がものをいい
夏終りいとしきものに髪を梳く

ものを見る楽しさが句主をゆたかにする。
魂をぬけがらにして月冴える

この辺で折れたいチャンス見当らず
ドライフラワー女一人の愚痴もきき

盆近し桔梗悲しい色を着る
平行線きびしいものをうちに秘め

空白の欲しさが草をむしらせる
ものを欲しさが句主を大きくする。

▽小野克枝

静かに風を聞いている青い果実酒か。

足元を見抜いたらしい目がこわい
髪型を変えて今年へ身がまえる

毒になる金も送って母である
夫婦とはこんな小さなことでもめ

忍耐の心を欲に切り変える
失敗を黙って見てるこわい人

同じ服同じ笑顔で友に逢い
まぼろしを追う水かきの無い女

鋭く自分と周囲を見ていて、それでいて
人を自分をきずつけない。

睨めつこしながら夫について行く
間をおいて正直だった子をほめる

運の良い人のうしろに従いて行く
精一ぱい燃えてカンナは秋を恋う

やさしく周りを見まわす眼もこの人は忘
れない。

▽生信笑子

雪を割って出た露のとうの眼を射る緑りと
春を呼ぶ香りを感じる。

野菊よ野バラよ我は旅人
美しき誤解只今恋愛中

青春の涙きらきら光る
モナリザの笑いへ私も笑ろうてみる

なつメロへ母のハミングうれしそう
若草の香り少女は何をうろたえる

教会の鐘はまっすぐに聞こえて来る
現実を見詰めた上でのロマンが美事に心を

とらえる。

この道を行こうふり向きはしない
さっそうと歩くバッグ聞いていた

逆らえば竹はビシリとはねかえり
姿見の中の私は誰だろか

時にピシヤリと切り返す鋭どさに嫌味が
ないのでもいい。

以上でベストテンは終わったことになるが、
10句組が5人、9句が2人、8句が2人と紙

一重の人々が目白押しに並んでいるので、せ
めて句を掲げて今年の躍進の楽みとしたい。

▽西出栄

口止めをしてまで言うた愚痴を悔い
一切れの鰻で夏やせ気を休め

▽宮西弥生

京の庭みな善人にして帰えし
さりげない別れを追うて便り来る

▽河野君子

イミテーション今日の身飾るにふさわしく
雨しとど薔薇の虚勢が哀れとも

▽林瑞枝

梅活けて恋人待つかの如き祖父
達筆の便りソファで拾い読み

▽木村 弥栄子

寶石のような想い出あるすくい
永遠に愛したいからピリオド

▽錦織 文子

葉桜よこのすばらしい息づかい
病む母の手のぬくもりを抱いて去ぬ

▽楠 貞子

近づけば近づいて来る愛と知る
ほう帯の位置は気にせぬミニをはき

▽宮尾 あいき

もうすぐ嫁にゆくのはまだデパート
雲の峯へ賀状がわりの香をたく

▽高橋 千万子

新聞に包んで渡す知恵をかし
年の差がこうもはげしくうろたえる

女性優位

— きのうきょう —

本多 柳志

◇本年全国で成人を迎えた人は、百九十三万人その内訳は、男九十七万人女九十六万人で男女殆んど同数であった。ここで少し新聞の受け売りをさせて貰う。面白いことに赤ちゃんの出生率を見ると、女の子百人に対し男の子は百五人から百七人で、いつも男の方が多

く生まれている。このことは明治以来あまり変っていないそうである。反対に生後一年以内の死亡率はと云うと、女百に対し男百十六と男の子の方が必ず多く死んでいる。一昨年の統計では女百対男百四十を越えているのである。女の子の方が男の子より強いということはこの数字がはっきり示している。女が強くなったのは何も戦後ではないということだ。力くらべでは男の方が強いんだが、生命を維持するに必要なエネルギーは、男の方が余計に要るのだそう。耐寒くらべの実験でも女の子の方がはるかに強い。小児科で注射がこわくてワンワン泣くのは男の方だというのが中島先生如何でしょうか。中学生頃から男女の差があらわれ始めるようだが、最近男勝りの女が二人目につく。オーストリアの十五才の女子水泳選手が作った世界新記録は、日本の男子の記録より七秒早い。ガンジー印度首相はヤヒアカーン پاکستان大統領を屈伏させている。

◇さあここで一つ我々の川柳塔をのぞいて見たい。十二月号で発表された四十六年度秀句抄九十九句の中に女性の句は二十五句つまり二割五分ある。四十二年からの路郎賞六人の中に一人、川柳塔賞五人の中に実に三人の女性がいる。総計十一人の中四割が女性である事実に。川柳塔で見る限り、川柳作句の詩的能力において決して男女差のないばかりか、女性が優位にあることは、大万川柳四十六年度ベストテンで、恵二期、一三夫、水客氏らのベテランを押えて、堂々上位四位を独占し

ている事実を見るまでもなからう。
毎月の本社句会でお目にかかる、約十人余りの女流作家はその見識にもその実力に於ても堂々柳界を闊歩して戴ける人達である。大きな自信と誇りをもって、ゆめゆめ男性既成作家のまねなどなさらずに、どうしても女性でなければ詠めない境地を開拓して戴くことをおねがしたい。

福寿草松にしたがいそろかしこ
男みな阿呆に見えて売れ残り
たまに逢う恋は指先まで喋り
転ぶことさえ女といふ不便
漬物の茄子の色よき夕の膳

★

川柳塔社役員懇親会

恒例の在阪役員新春懇親会が一月二十八日午後六時から、心齋橋大成閣で開催された。出席者は生々庵、小石、春果、没食子、文秋、古方、柳志、水客、葉、静馬、形水、いさむ、多久志、葵水、柳宏子、小松園、与呂志、季贊、一三夫、葉子諸氏。

この日、生々庵、薫風、与呂志諸氏は季贊氏の案内で『山陽新幹線』に試乗。岡山、新大阪、大成閣へと超特急なみですべりこまれた。薫風氏は所用で欠席、季贊氏と与呂志氏は特別出席。

川柳塔家族の笑顔がいっぱいだった。
▼二月四日の常任理事会は四月号からの新選者、葉氏と小松園氏を激励。出席者は葉、小松園、生々庵、古方、一三夫諸氏。

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自 四六年十月号
至 四七年一月号

路郎賞候補作品

北川春巢

マンネリを断たん木刀素振りする
宝くじ本気で希望もちはじめ
女の眼死火山に火を入れんとす
宝石を蹴っておんなの道けわし
ピエロから素顔に戻る大ジョッキ
ついて来てくれる娘に気がつかれ
感情を押える暑冷えて来る
ローン無事払えますよう地鎮祭
お年玉値上げとやりまひよか老夫婦
散髪をして再就職の門出とす

西尾

湖の色に絵具の躊躇なし

史好 柳志 村諷 千翁 醉々 操子 美代 珠笑 一栄 鉄児 徹也

川村好郎

終電の誰かに撮みたい気分
カブト虫強いヤツから売られていき
一枚の舌しか持たぬ男なり
外人の方が詳しい法隆寺
午後二時の向日葵誰も寄せつけず
私の音きたし池に石を投げ
前向きの姿勢で空白もて余し
睨み耐える苦痛が洩れぬよう
「ある男」——そんな記憶にばくも
伝説に濡れて来ました旅の雨
手の冷えをあずけし夢をいとほしむ
ご先祖はたとえ賊軍でも旧家
見えすいた嘘へうなずく日をおそれ
脱ぐなら脱ぐ着るなら着るで夏の服

史好 静馬 雀踊子 鬼遊 葵水 醉々 美代 正朗 一三夫 千翁 奈良子 求芽 克枝 水車

菊沢小松園

お引きとり願うキツカケだけの待ち
直ぐ補正組める政府が羨まし
喪の家にドラマの後篇はじまりそう
刺の無いバラになりた刺煮着
たいこだけ聞いて祭の台所
時計ふつてみるお前も疲れたか
さりげなく見つめて未婚いぶかられ
病院で飼われた風の不祥
時計ふつてみるお前も疲れたか
残り火が炎えそで消えそで秋になり
捨てられる猫が風を捕ってきた
一枚の舌は不便なものと知り
食うために飛んでる鷗が歌になり
この寺も何処かへ行けというネオン
のしかかる波に残高確かめる
寡婦へ吹く風は北風ばかりなり
ほんとうは寒いとミニはおっしや

次章 圭井堂 一三夫 克枝 操子 鬼遊 奈良子 侃流洞 鬼遊 美代 克枝 甲吉 新之助 滋雀 鬼遊 甲吉

若本 多久志

「何とかするよ」悲しいためいき

桑食べて蚕運命にさからわず
その罫に女の業は住みついで
合掌の二字で結んだ無心状

宝石を蹴っておんなの道けわし

放してやったことおらら声で啼き

切れぎれの夢に時々灯をともし

金持たぬ親なり小そう小そう生き

十年添うても愛を確めたい女

腹の底割って男に酒がある

役不足いわずに城の石ひとつ

人間でそんなもんと慰める

正本 水客

湖の色に絵具の躊躇なし

間を置いて正直だった子をほめる

妻の持つどの免状も使わせず

杉木立いま満月を差し上げる

肩まで出して窓口に教えられ

曲がろうとしないで水が進じる

木屋が匂うて雨に叩かれる

酔い痴れる男仕合せそうに見え

ひねもすの氷雨ひねもす火を抱かせ

喚閉す耐える苦痛が洩れぬよう

沢山の人が歩けば道になり
宝石の売り子遠くの方に立ち

川柳塔賞候補作品

戸田 古方

いじらしいほどに自分を出したが

ワイシャツのよごれ気になんか

クーラーがいやいや窓にぶらさがり

年寄らぬ事もさみしや夫婦離

イメージチエンジきでせがね買

いっからかあくびに蓋をしなくなり

旅路遙か 心の地図を買いに出る

ある意味で馬鹿とも見える蟻の列

自動ドア突如ひらいて犬覗く

庭下駄を息子が履いてゆるくなり

耳たぶの羞恥を知らぬイヤリング

幼虫の過去にふれまい揚羽蝶

高原に寝そぶれば僕も又虫けら

しっくりとさつきは石に添って活

秋の陽はストンと話を打ち切らせ

月の雫かポトリと一つ雨上る

美しい耳に偽りささやけず

人妻が描く紫のはのは

父と子のアメ玉ほのぼのと対話

大坂 形水

虎城

豊平次

岳太

一室

みどり

千歩

十止庵

葉子

朽

虎城

利美

葉子

久司

千歩

輝親

露芳

富子

西合

富子

露芳

橘 高 薫 風

平行線きびしいものをうちに秘め

つまづいた石に言葉のある如く

耳たぶの羞恥を知らぬイヤリング

嫁が来て養老院を禁句にし

倒産を知らずや熱帯魚がお座

平安な老い小魚の骨せせる

還暦へ大波小波なつかしみ

八十の母つくねんとただつくねんと

嫁く話別れ話を聞く炬燵

あの人の居ない世界も考える

イヤホンかけて蛸焼き焼いている

芳子

重人

花子

仲美

美子

豊平次

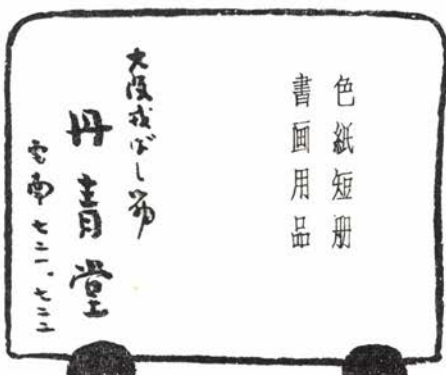
虎城

千代香

秀子

秀子

秀子



通行止め

新谷 笑痴選

ここからは車通さぬ石を据え
昨日迄無かった等と引かえし
教えてから通行止めを想い出し
失対の通行止めは年を越し
通行止め此処で予算が切れました
通行止めこんな月見草が咲き
通行止めの縄野次馬をつま立たせ
高速道吹雪がゲート締めさせる
感情を通行止めする理性
此処からは車禁止と言う祭り
此処彼処通行止めがあり世論
通行止めですがな儲りまっかいな
交通止め云々ちやない我が家火事
通行止め牛が寝ている過疎の村
この路地はママ事遊び通せんは
誰れも見て居ない通行止め跨ぐ
私有地という通行止めのベニヤ板
有線が通行止めを流す朝
詳細は巡査も知らぬまんま止め
通行止めしといて工事一服中
通行止め鼻歌こえるマンホール
料金所通行止めを出して去に
行先が通行止めの奥にあり

眺明 潔太 軒太 同住 可翁 章雅 貞祐 酉合 魚山 凡九 古方 曉風 素身 杜月 本藤 木魚 代仕 洋人 重人 輝親

腕章が通行止めを越えて行き
ハッパ何時鳴るか通行止めで待ち
柿熟れて通行止めの札を立て
通行止め無視し突込む事故現場
凸凹のままで通行止めが解け
誰がしたのか通行止めが逆
近道ができなくなった有刺線
車馬通行止めて文化財保護される
通行止め長引きそうな雪になり
通夜の席通行止めの策語る
通行止め植木をほめて庭を抜け
通行止め引き返そうか走ろうか
改札の一つを止めて駅の閑
爪跡は通行止めの土砂なだれ
通せんば子供の遊び夕映える
お役所の名が入っていない通行止め
鉢巻が通行止めのピケを張り
手抜き工事が通行止めた豪雨
事故起きてから通行止めにされ
住
タクシーがもう知って通行止め
通行止め縦割政治三度する
人以外通れまさんと橋が朽ち
通行止め過疎をなくする発破音
かあちゃんが赤旗を振る道普請
人
通行止めそれから雪が積るまま
地
通行止め田舎なる程田舎なり
天
檜山の道とざされて置いて出る
伶人 松花 国彦 一郎 不二 カズエ 与根一 悠泉 智司 英詩 笑笑 同古 同心 いわを 佳女 白汀 止水 保夫 三和 里風 魚山 宵明 葵水 南奉 貞祐

万的・杜的共著

句集「的」

送料共 四〇〇円

軸

見落した通行止めに時を悔い

助手手

井阪東天紅選

生涯をあなたの助手と妻笑顔
モルモット相手に助手の日が暮る
ハンドルはママに委ねるパパが助手
研究は助手がしましたとは云わず
この助手が間違いましたといえず
表彰を助手に分ける盃を上げ
助手席で未来を語る肩を寄せ
助手席の方が疲れる初免許
下積みの助手でローカル線に生き
腕のいい助手に先生あやつられ
食いぶちは当方持ちで助手勤め
助手席へ乗って夫婦の共稼ぎ
助手買って出る気上衣を脱いで
ハンサムな助手で先生チトやかせ
三十四 宵明 里風 信二 古方 千翁 久司 翠月 恵子 七面山 曉風 葵水 西合

目の合図だけで心の通う助手
家計簿へ孫のソロバン狩り出され
こころは助手にまかせぬメスを取り
妻助手にしても打つ釘ひんまがり
デモ以来助手と教授に溝ができ
助手の知恵でピンチを切り抜く
ばくが助手になつて宿題出来
国許の送金続きいまだ助手
助手を握つてたいてい無理が効き
その辺で相槌を打つ助手がいる
初舞台今日は師匠が助手になり
助手席へ乗せて晴衣へ気を使い
美容院 お国訛りの助手がくる
事故現場 助手が替つていた不覚
助手今日もミクロの世界を追つて暮
助手席の今日は相手のかわるミニ
惚れたから一生助手でいるつもり
ほんとうの仕事は助手がまとめ
デゴイチの助手でカメラの列を
住
棚ひとつ吊るにも妻の助手が要り
助手席へ下校する子を拾い上げ
助手だけが先生先生とたてまつり
助手席に新妻が乗るトラクター
如才なく助手にも頭下げて去に
人
助手もなく田舎歯医者によく待
前借りの癖ある助手でよく休み
天 地
大学を出て大学の助手になり
伶人 木魚 止水 止水 木魚 伶人

ヒナ祭り

若柳 潮花 選

鼻と手がみな欠けている母のヒナ
ヒン餅と白酒だけが大きすぎ
平安朝の顔が自慢の流し雛
みぎ左序列でもめるひな飾り
値切るだけ値切つたヒナの顔で
暮しにも余裕が出来てヒナ祭り
ご多聞にもれず月賦の内裏さま
かみびなが寝息きいてる母子家庭
ヒナ祭り寝床の向きを変えさせる
一とケースおまゝ団地のおひなさま
ヒナ祭り祖母の手製も飾られる
ヒナ人形 今年も年を取らぬ顔
保母さんが張り切っているヒナ祭り
ヒナ祭り 年々派手になってゆき
ヒナ祭り 父には別に爛をつけ
ヒナ派手にかざつて間借りね
ヒナ祭り 本当の母が恋しくて
親の見栄 派手に飾つたヒナ祭り
ヒナ壇に女の歴史飾られる
娘にも見栄ヒナの値段をこ張する
楽団のようにも見えるヒナ人形
春風を知らず ガラスの中の雛
ヒナの酒果さぬ夢の愚痴となり
宵月 初祐 貞祐 千代香 七面山 素身郎 西合 木魚 紫香 思月 カズエ 輝親 国彦 不二 秀峰 春日 与根 翁童 南司 露杖

ママゴトのヒナへ菓種の花をさし
子の夢はわが家に欲しいお雛さま
ヒナ段にコケシも数として飾り
初孫の眼はまだ見えす ヒナ祭り
怪獣もお供に侍る ヒナ祭り
五人目が女でヒナは陽を拝み
ヒナ祭り 家風の隅をのぞかれる
ひな飾り 母と倅せかみしめる
初びなを 団地サイズにして祝い
住
世相ヒナ 今年はスキー 帽かぶる
盛大な女系家族のヒナ祭り
官女の手折れてるままを娘に譲り
ひな段一と間を明けてせまく寝る
母のひな娘のひな世相を抱き立ち
人
読みとれぬ 内裏の箱を積み重ね
初孫に贈つたヒナに招かれる
天 地
ヒナ祭り子供部屋から灯が消えず
軸
細巻へ母がもてなす ヒナの膳
若本多久志 句集

「老いの坂」

送料共 五六〇円

初歩教室

——題「盛」——

本田恵二朗

美辞麗句盛り沢山にする祝辞

比呂路

これで一応出来たように思えるかもしれないがもう一と息練り上げなくてはならない。何しろ十七音字という小さな皿に、味もよく、見た目もよく盛り上げるのだから、蛇足を切り捨てないことには、とても盛り切れるものではない。そこで省略の妙技を会得する要が起きてくる。省略のないところ必ず説明句になつてしまふと言つても過言でない私は思つてゐる。省略によつて、もつと効果的な語句を入れることが出来て、句が生きてくる。美辞と言へば麗句と附けねばならぬと思ひ込む必要はない。麗句を捨て、沢山を捨てることを考えて見よう。すると次の如くなる。

(美辞山と盛つた祝辞が欠伸呼ぶ)

欠伸が出ただけ句が面白くなつたと思う。

盛大な拍手で決勝近くなり

静泉

同一の句材が表現を変えると味がよくなくなつても忘れてならぬことである。この句の場合、決勝点が近くなつたので万雷の声

援の相手が湧き上つたのだが、私のような、臍曲りの目には、あたかも相手の方が決勝へ呼び寄せ近づかせたと見る。

(盛大な拍手がゴール近うする)

ハミリがうろうろ人垣縫う盛会

スケッチした通りを、そのまま述べるとこの句になるに決つてゐるが、どこかもの足りないものとなつてしまふ。

(ハミリがもみくちやになるほど盛会)

全盛の頃もあつたにドル・シヨック

(盛業ヘグサツと刺つたドル・シヨック)

お白粉が盛りを過ぎた肌で泣き

(お白粉が盛りを過ぎた肌で泣き)

盛装を互に値ぶみする女

(盛装を値踏みし合つて妬き合つて)

食盛胃袋を母確める

(食い盛り母あきれさせよこばせ)

盛業の店をわが子に継いで齡

(盛業を子に継がせると齡が言う)

お手盛りで賛成賛成ちちもなし

(お手盛りへ党派忘れて拍手する)

売家はみな盛業中と書いておき

(売りに出た店はどうれも盛業中)

落花盛ん花も見頃を過ぎにけり

(ちらほらと盛りを過ぎた花あわれ)

お金を着ています盛装の女

(盛装のまるでお金を着たみたい)

盛大な挙式ふるさとは知らず

(盛大な挙式見せたい母や亡し)

ご盛んと言われても年は承知せず

(ご盛んとおだてられても年は年)

初詣商売繁盛人の波

(初詣商売繁盛だけ祈り)

宵戎参拝多く盛り上り

(宵戎ひしめきおつて盛り上り)

盛り場で補導されてる中学生

(盛り場で補導の網にひつかかり)

泡盛に腰を抜かれてぶつ倒れ

(泡盛に抜かれた腰をもて余し)

おじょうさん花の盛り過ぎぬまに

(婿探し花の盛りの過ぎぬ間に)

お盛んでなどとおちよくられるも年か

(年なれやお盛んでなどとおちよくられ)

盛花に遊ばす本に疲れた目

(盛花が読書疲れの目に媚びる)

盛り皿の趣向もお正月の味

新年会社長の安来も出て盛ん

やめぎわに盛沢山の花咲かせ

繁盛を祈る賽銭気前よし

盛会へ蔭の苦勞を思いやり

盛装が石焼芋へためらわず

恐ろしいほど言論の花盛り

盛大な拍手プロジェクターから合図

定食の盛り切り若い目に小さい

ドル・シヨックどこ吹く風と今宮さん

(今宮さんドルがどうあれご繁盛)

盛大な葬式あれは暴力団

盛つて見て一寸へらして小商人

盛り上る泡公休の洗濯機

縄のれん今日開店の塩を盛り

盛装の見せ場奪つて雨無情

ますゑ

賛平

隼人

濁水

秀村

貞祐

陽山

三十四

藤持

保夫

本蔭

西合

同童

同シゲ

好一

同カズエ

同子

花子

盛衰を語る墓石へ見栄を張り
盛運を嫁の手柄と酌む男

同 露杖

こきげんな舅が、ちびりちびりとのんで
るところまでも、皿に盛り上げようと欲張っ
ている。酌む舅など無理に割り込ませなくて
も、ムードがわかればよいではないか。

(盛運を嫁の手柄にして平和)

与党ばかりの盛んな拍手で幕を閉じ 千夏
幕を閉じるまで言ってしまったくないと承知出
来ないから、十七音字の皿からこぼれ出た。
十七音字にまとめる苦心を積み重ねなくては

再見 わが満州

中川 晃 男

本誌に毎月欠かさず書いて居られる東野大
八氏の満州追憶記は、もう何年続いているこ
とだろう。それにしてもよくまあ話の種が尽
きないものである。もともと世間知らずだっ
た私と大陸放浪の大八氏とはケタが違うのだ
からアチラ生まれの私が「へーこんな事があ
ったのかナ」と目を丸くしても当然なのか知
れない。——などと憎まれ口を利くのも、大
八氏と私が満州の何処かで、或は一緒に歩き
或はすれ違っていただろうという親近感を覚
えるからなのである。

何と云っても大陸の想い出は古き好き日の

上達はおぼつかない。

(盛んなは与党ばかりという拍手)

盛り分けにまずまず継母は気を使い

(盛り分けに心を配る継母なれば)

愛嬌も出て来たがもう盛り過ぎ

(盛りを過ぎてからの愛嬌あわれとも)

三人も大臣お伴にご盛んな

反抗をしたい盛りが火を呼んで

(反抗をしたい盛りが燃えている)

値上げ反対盛り上りの餌とし

(値上げ反対掲げて結束盛り上げる)

同 静観堂
頼 次

所産である。苦しかった悲しい過去は薄れ
て、楽しい面白かった出来事が浮かび上がっ
てくるのも道理であろう。

さて大八氏ご紹介にかかる私の郷愁切なる
ハルピンである。自分の家は「アカシヤの花
咲く大連」にあったが、勤めていた満鉄の最
前線北滿の鉄道建設現場を転々していた私が
父母姉妹の待つ大連に帰るのは年に一度位で
あった。日本人が大半を占めるその大都会よ
り、案外胸の端に引っかかっているのが荒涼
たる北滿の風物と、帝政ロシアの香り豊かな
ハルピンで……。

駅を降りた真向うの広場に小じんまりした
木造の中央寺院が格式を誇り、満人の密集し
ている馬家溝、日本のデパートなどが立ち並
んだ地段街モストワヤ街、そして大八氏ごひ
いきのキタイスカヤ街はマルス・ビクトリヤ
のサモワール、チューリンデパートのドアマ
ン・カイゼル髭の太った老人は昔貴族か將軍

お盛んなことでと含みありそうな
ウーマンリブ男盛りの目のやり場
盛りつけたリンゴと一緒に彼を待ち
盛大な拍手の中にある孤独

同 凡九郎
同 富喜子

春の足音がもうそこに聞えて来る。好季節
となると心身共に爽快となり、明朗な句が生
れてくるものだ。それを待望して止まない。

作句街道は晴天続きである。さあ行こう。

題 移 三月二十日締切(五月号発表)

宛先 岡山県倉敷市下津井三五二 千七一

本 田 恵 二 朗

か、モデルン劇場のロシアバレーには日本人
ダンサー小牧正英氏が主役で飛んだりはねた
りしていた。

そのキタイスカヤを突っ切った所を流れる
大河スンガリーは、河なかにある太陽島を中
心としてエトランゼの避暑客で賑わうが、零
下三十度の厳寒には水の十字架を押し立て
て、厚く凍った河を割って氷上洗礼祭が行な
われる。見ている方がゾッとなるのに、熱
心な旧教徒は娘たちまでも河の中に入って水ご
りをとるのだ。果てはその水を瓶に詰めて持
帰るのは日本の風習と似たものがある。

秋の空は青く澄み切っている。私の立って
いる陸地は海で切れて了うけれど、この青空
は世界をつなぐ。私の生まれた且つての中華
民国、育った満州へも拡がっているこの秋の
空は私の思いも伝えてくれるのだろうか。

ふるさとへ青くつながる秋の空
想い出へ戻しよもない皺いくつ

大萬川柳

「波」

此処で波静めて帰る繩のれん
 人波と逆に夜勤の歩を急ぎ

波爛万丈他人の歴史である興味
 東大阪 生 長

金借りたうえ波風を立てて去に
 宝塚 静 馬

八分主義不況の波にちやぶつかず
 堺 慶之助

受信料払わなくてもくる電波
 今治 宵 明

よせる波歌あり詩あり桜貝
 羽曳野 吐 来

波に乗る間は世間放つとかず
 羽曳野 可 動

さざ波のこ慕情が疼く夜のワルツ
 米子 瑞 枝

宅地化の波一徹の鉄を振り
 堺 真沙子

選者 川村好郎
 投句総数 六百四十九句
 入選 七十三句

北斎の波は公害知らぬ海
 倉敷 克 枝

逆境に友情高く波を打つ
 松江 通 児

大波小波人生の波塩っぱい
 倉敷 里 風

過去捨てに來たのに波の静かすぎ
 新宮 溪 水

波に背を向けて男にある野心
 新宮 久 司

かげのある女波紋を置いて去に
 兵庫 可 住

男ならやれと怒濤になつて見せ
 鳥取 佳 女

人生の波人情でぐぐり抜け
 米子 新 雪

婚約をしる波紋と対話する
 神戸 牧 人

浮草の生きゆく波は逆らわらず
 大阪 新之助

合理化の波紋不況があふりたて
 大阪 水 客

砂丘どこも旅情のままの波になる

凡人にへんてつもない波の音
 富田林 花 梢

お隣りへピアノが着いた日の波紋
 岡山 カツエ

波狂う海に男の詩がある
 岡山 千代香

ある波紋女の吐息聞いている
 堺 筑 前

告白の波紋ねむれぬ夜が更け
 鳥取 洋 々

潮騒の過去ゆさぶりさせる悔い
 大阪 滋 雀

投げた石波紋見つめて施策練る
 倉敷 翁 童

取り返えしのつかぬ波紋を追う
 富田林 美 代

めだかなりの波紋ひとすじ池は春
 倉敷 扇 水

海を見て又泣く母と来た波止場
 小松 魚 山

波紋かき乱してエサをまた取られ
 岡山 七面山

ドルシヨックの波紋二号邸も及び
 東大阪 弥 生

波風をひとり受けてる母がいて
 愛の波紋無情の人にゆれつつけ

恋しない女の過去にある波紋
 大阪 真 砂

心の波押えて母として生きる
 藤井寺 吸 江

大物のところで汚職の波が消え
 暗転の舞台は波の音で開き

花挿ぐ日へ魔の海の波静か
 今治 昌 道

当然の波紋へ中座捨てせりふ
 倉敷 梁 水

荒波の或る日は妻に励まされ
 雲行きの悪さへ築く防波堤

傷心を忘れたまえた波の音
 鳥取 智 司

脇役を自認波紋に漂うて
 松江 与根一

たくまざる波美しく岩を彫り
 しばらしい波濤自殺の名所にて

荒波へ權持つ夫を信じ切り
 鳥取 静 泉

子等教えるわたしも過疎の波も受
 米子 花 子

大波も小波も越えてきた意見
 波頭トラボットへ少し媚び

波の音売れない詩を書いてる
 埋立てが進み波音さえ濁り

戎さん覚え切れない人の波
 波に乗りすぎて傍目に危ぶまれ

さざ波も立てて夫婦はまだ若い
 ニクソンは波を立てたり静めたり

大物の一言波紋の渦が消え
 大阪 比呂路

度の過ぎた親切波紋の種になり
気がつけば波紋の種にされた僕

吳 英 詩

鍵っ子の石で波紋を画く池

七十五日そろそろ波紋消してゆき
鯉跳ねて波紋は月を千々に裂き

佳 句

大阪 十止庵
嗷う国怒る国から寄せる波

大 阪 圭井堂
一ときも同じ波紋でない砂丘

倉敷 克 枝
波のない性で支えた今日の道

松 江 通 児

浮遊機雷波の稚気では済まされず
馬耳東風波紋の外へ身をかわし

吳 英 詩

大阪 水 客
波紋の中心におらねば女気がす

地ノ句

藤井寺 吸 江
郷愁をつのらす波がた白い

天ノ句
大 阪 智 子

ヘドロの海無策な波が寄せ返す
選者 吟

荒波を乗り越えてから舵たしか

昭和四十七年度

ベストテン

(二月現在)

一二 真砂

一三 通 児

一四 克 枝

一五 真沙子

一六 白水

一七 藤井寺

一八 大 阪

一九 吳

二〇 大 阪

二一 鳥 取

二二 大 阪

二三 島 根

二四 大 阪

二五 米 子

二六 倉 敷

二七 大 阪

二八 大 阪

二九 大 阪

三〇 大 阪

三一 大 阪

三二 大 阪

三三 大 阪

三四 大 阪

三五 大 阪

三六 大 阪

三七 大 阪

三八 大 阪

三九 大 阪

四〇 大 阪

三〇 大 阪

二五 松 江

二五 倉 敷

二五 堺

二五 岡 山

以下略

五句以内

締切 三月二十日

締切 四月二十日

第五回 「家」

投句先

大阪市南区鰻谷仲之町二〇

川柳塔社内 大萬川柳係

老いは人生の至境

―貝原益軒―

福井野迷路

人の身は百歳をもつて期(こ)とす。上寿は百歳、中寿は八十歳、下寿は六十歳なり。六十以上は長生なり。世上の人をみるに、下寿を保つ人少なく、五十以下短命なる人多し。人生七十古来稀なりと云えるは虚語に非ず。長命なる人少なし。人の命なんぞかくの如く短かきや。

養生の術なければなり。短命なるは生まれつきに非ず。十人に九人は皆みづからそこなえるなり。人生五十に至らざれば、血氣未だ

定まらず、知慧未だ開けず、古今にうとしくして世変になれず、言にあやまり多く、行ないに悔多し。人生のことわりも楽しみも未だ知らず。

長生きすれば楽しみ多く益多し。日々に未だ知らざることを知り、月々に未だ能くせざることをよくす。この故に長生の術を学び、

いかにもして年を保ち、五十歳を越え成るべき程に愈々長生きして、六十、七十以上の寿域に登るべきなり。しかも人の命は我にあり天にあらず。

野迷路今回満八十歳を迎えて貝原益軒先生の言葉を読者と共に味わつてみたいと思ひます。そしてこれを現代医学を通して短かい言葉にすりかえて見たいと思う。

一に禁煙 二に咀嚼 三に笑顔でよく眠れ

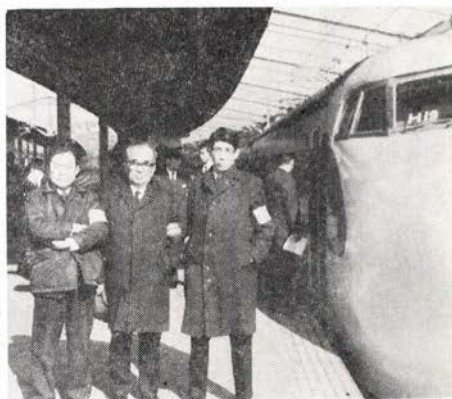
☆

禁煙はこれを読んだ時から始めること、咀嚼はよく噛め一口三十回以上かむこと、茶漬厳禁、過去将来の不安心配を棄てて、笑顔に帰れそしてよく眠れ、酒はどうじや？さあそれは、さあそれは？お預け。いや適量適量。(筆者は元海軍軍医中尉)

▼中村与志著「煉獄」が川柳えんぴつ社から発行。氏は同社の副会長。「煉獄」の坂を越ゆれば平地かも。以下九四ページ。送料共五百円。発行所〒936-001富山県滑川市小鹿野一〇五一、脇坂方同社。

▼島根県観桜川柳大会は、四月十六日午前十一時から、木次町体育館和室で開催。選者は大坂から榮、小松園、水客、天笑諸氏の予定。地元では緑之助、三雷波両氏選。

柳 界 展 望



山陽新幹線試乗左から与呂志・生々庵・薫風諸氏

橋 高 薫 風 担当

▼麻生霞乃先生はお元気で
ある。一月中旬に生々庵主
幹が生駒へ行かれ、久しぶ
りに歓談された。
▼中島生々庵主幹はNHK
山陽新聞の選者以外に、堺
商工会議所の議員さんや会
員諸氏の川柳の選を一月二
十日締切で発足。なお五月
には合息ご夫妻がいのアメ
リカへわたる予定。
▼山陽新幹線の試乗には一
月二十八日、生々庵主幹を
はじめ薫風、与呂志氏を季
替氏が案内された。一月十
日には静馬、柳宏子、一三
夫氏も試乗。

▼川柳塔社新春役員懇親会
は一月二十八日大成閣で開
催。
▼平安川柳社創立十五周年
記念川柳大会は昭和四十七
年五月二十一日(日)午前
九時三十分から京都市左京
区岡崎公園の京都館別館
で開催。兼題、味方、針、
花壇・舞う・薨、各題二
句、欠席投句は不可。当日
十五周年記念作品・論文の
当選発表、授賞式が行なわ
れ伊藤入仙・北川絢一朗・
田中秀男・西沢青二・福永
清造合同句集「薨」が発売
になる。

▼第五回東洋樹川柳賞は平
安川柳社が受賞することに
決定、贈呈川柳大会は四月
二日(日)正午から神戸の
海洋会館で開催される。
▼川上三太郎賞第三回作品
が公募されている。雑誌七
句(新作に限る)、締切は
三月十日、今年の審査員は
白石朝太郎・柴田午朗・佐
藤正敏・大野風柳・片柳哲
郎の諸氏。三太郎賞作家に
は賞状、記念品と副賞五千
円が授与される。投句はハ
ガキ大の用紙を使用、参加
費二百円を同封のこと。新
津局区内本町一柳都川柳
社宛。
▼柳都賞の昭和四十六年度
受賞者が決定した。同人賞
内藤進一路氏(長岡市)妻
と子にいつつもつまずきやす
い僕・同人賞加藤清氏(新
発田市)〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
な冬のサンクラスー会員賞
吉田成一氏(岩手県)北上
川合掌すれば見えてくる
▼昭和四十七年紋太忌句会
は四月十六日正午から神戸
市立総合福祉センター五階
で開催。兼題、咲く・無名
でゆっく・家、投句は四
月十日までに神戸市東灘区
本庄町深江栄通二丁目二一
光森良宛、投句料百円。

▼一九七一年度川柳ジャ
ナル年度賞が発表になった
年度賞渡辺可奈子「致死量
とおぼしき暁の真水」ほか
一年間の作品。準賞は金子
青泡・向山乃影子の両氏。
▼みなと二百号記念川柳大
会(名古屋市)は三月十九
日(日)正午から名港海運
ビル九階会議室で開催。
▼武玉川第九集(下村梵氏
編集)豪華な執筆陣には本
誌でおなじみの東野大八、
富士野鞍馬先生なども書い
ておられる。
▼第二回誌上全国川柳大
会。風刺吟、青竜刀選。白
美吟、富二選。十四字詩、
美江選。課題・成長・徳三
選。避難・とんぼ選。日本
の美・柳陽選。不死身・白
露選。各題三句。出句料三
百円発表誌呈。三月十日締
切。〒二五〇小田原市鴨宮
三七二一二、関水華方川柳
路吟社。
▼米沢曉明氏(大洲市)機
を見て川柳塔社へ立ち寄り
たく思っています。四五人
でゆっくり見たい京の庭
。 曉明。
▼備前川柳社賞(四十六
年度)優秀句「真直ぐに生き
てかけひきなど知らず、兼
光浄美。準備優秀作」空席に

第五回東洋樹川柳賞贈呈川
柳大会「受賞者平安川柳社
日時四月二日(日)十二
時。会場 海洋会館(神戸
市生田区中山手通三ノ八六
「島」 柴田 午朗選
「大学」 大森 風来子選
「男と女」 西尾 言也選
「飼う」 橋本 聡夢選
「家」 榎本 秀果選
「いのち」 田中 秀果選
各題二句 (秀逸星賞)
講演 福永 清造
会費 三百円
主催 時の川柳社

座ればこはすきま風、武
元柳子。同、消えて行く虹
だからこそ美しい、杉原胡
風。
▼せんば六月・十二月合併
号は昭和四十六年十二月一
日、吉村翔我追悼号として
発行された。
▼柳宴(岐阜市)新年号は
昭和四十七年一月一日、明
二・鱗魚遷厝記念号として
発行。
▼国鉄川柳一月号で、浜田
久米雄氏(岡山県同人)は
幹線集(作品)に、阿万万
的氏(津市同人)は雑誌山
脈集選者に、永尾英断氏

(兵庫県同人)は句集評の執筆にそれぞれ登場された

大萬川柳会の四十六年度ベストテン招待川柳大会は二月二十七日「大萬」で開催大盛会だった。

▼第十八回八尾市文化祭川柳大会作品集が発行された

▼尼録之助氏(出雲市同人)の句碑が今秋を期して建立されるべく、独仙・柳慶・草丘・章峰氏らを中心に計画されている。場所は日御崎、句は昨年の路郎賞受賞句、「灯台の夕陽神話を抱きよせる」

▼昭和四十六年度いずも川柳賞が決定、堀江正朗氏(鳥根県同人)が受賞された。「雲走る子を持つ母の独りごと」

▼竹内李朋氏退院、森山健太郎氏結婚祝賀句会は昭和四十六年十二月五日出雲市の料亭翠泉で開催

▼川柳道場(倉敷市)百三十号記念全選者互選大賞作品が発表になった。大賞は

三宅成行氏(総社市)が獲得された。

一人で戦うとき男美しい華大賞は松下梁水氏(倉敷市同人)敗北感抱いて美談を聞いている。小野克枝さん(倉敷市同人)落書へきれいな夕陽降りてく

▼玉島新春句会は一月十六日遥照山の簡易保険センターで開催、成績当日一位の佐藤三幸堂氏、前年度年間一位の桑野林鶴氏にカップが授与された。

▼秋の大陸同窓会の打合せ会が一月二十三日三朝温泉で開かれ、大井正夫、河村日満、奥谷弘朗氏らのにぎやかな寄せ書きを拝受。

「せせらぎでおむつを洗うのも三朝」乱坊」ふるさとの川思ひ出の笛を吹く」茗人」「せせらぎを背なかにピールの座がはすみ」星影」「せせらぎを聞きつ 遠来の柳友と酌む」貞山」

▼国弘半休門氏(下関市同人)は一月一日と五日に九州三社初詣団(宮地嶽・宮崎宮・太宰府天満宮)を千六百人扱い、準備と輸送に没頭された。

▼工藤甲吉氏(青森同人)から、「昨年は孫に入れ替わり立替わり八回も入院されたり、家の普請などで少なくて落着くヒマがありませんでした。清々しい新年を迎え、今年こそはとひとり心に期しておりました。

▼水粉千翁氏(倉敷同人)指導の「川柳と俳画の会」の習作色紙展が五月六日七日の両日倉敷文化センター展示場で開催されたが、女性ばかりのグループのこととて男性川柳人の期待を今から集めているとか。

▼小砂白汀氏(鳥根同人)から、「暖冬とはいえ、矢張り寒ですので痛めたところが疼きます。」と。この冬の暖さに私の胃も大助かりです。ご自愛下さい

▼山田季賛氏(高槻同人)は、一月十三日から御陵巡拝の旅に出られ、十七日桜島一周まで各所をまわり相変らず元気いっっぱい。二月六日は天王寺園鉄川柳大会へ出席。

▼八木千代さん(米子市同人)から「母の実家に不幸がありましたので四・五日泊りきりで手伝っています。したが、大萬川柳会にはひとりで旅でも出かけたいと決心してもうかっています。」

▼堀江正朗氏(鳥根同人)の末のご子息が、この春国税庁税務大学に入学されることとなった。芳子夫人もほっと一息つかれた由。

▼小野克枝さん(倉敷市同人)から、「川柳塔同人のバッジ拝掌、人の作ったデザインを見て、これだけの事が思い浮ばないのだから、川柳も人の作品を聞いてこれだけの句が仲々作れないものだ」と感心している毎日です。バッジ誰方にも好評です。」

▼岸操さん(南柳氏夫人)は二月七日大阪警察病院で急逝、七十三歳。告別式は翌八日千日前ニッパツ美容室(長女秀子さん経営)でおこなわれ、生々庵主幹(代理)小松園、摩天郎、天笑、宏子、一三夫諸氏ほか柳人多数参列、謹悼。

▼風雅な柱がけ。松村(長一、間、巾四寸)茶色生地。文字は白抜き。あなたの玉句と雅号を書道の大家が揮毫。一架千五百円、送料二百円。本社でお話しします。

▼高鷲重純氏(藤村青一)は二月二十日銀河詩教室で「関西詩界の歴史」を講演

▼堺・若芽合同句会、三月十三日午後六時一題、呼ぶ

▼敏感・素人。摩天郎居

▼南海川柳会、三月十六日一題、乗車拒否・ナツメロ

あきらめ。会場 南海電鉄本社食堂内

▼南大阪川柳会、三月二十日、午後六時一題 丹精・不平・老妻・軽い。会場 松崎通二丁目以和貴荘

▼川柳東大阪、三月二十五日午後六時一題、景気・先生・計る・空想。会場 永和駅前東大阪市民会館二階。

新同人紹介

織田可津春

生々庵・薫風推薦

近況報告

元気でやっております。たけはら川柳会

植田英詩

本社二月旬会

会場 以和貴荘

七日 午後六時

札幌オリエンピックで金・銀・銅に入賞した
ジャパン日本にわく二月旬会。

まず多久志氏の柳話から幕があく。テーマ
は「川柳味」とは共感性のある川柳から——
ということであった。

他社の川柳と俳句を示めし、どちらが俳句
で、どちらが川柳かと。こうした問題が叫
ばれだして久しいが、柳俳接合は時の流れか
も知れない。若い作家が古句には抵抗を感じ
るだろうし、むずかしい問題だとも思う。

二月の月間賞は、題がむずかしいと云いな
がら、西尾栄氏があつさりさう。初出席の
杉本祐司氏が「美容食」で天位。これは金賞
に値するものである。(河井庸佑整理)

席題「豆」

小浜牧人選

豆を煮く秘訣もメモに娘は嫁ぎ 滋 雀
年越しの豆を吸い込むクリナー 薫 風
小正月黒豆だけがまだ残り 多久志
一升餅の底に不運な豆がいる 古 方
一粒宛噛みしめて見る年の豆 葛 城
豆嚙る入れ歯自慢を持て余し 与呂志
奇術のハトギヤラ上り豆の欲しい顔 誓 二

定年に五つ増やした豆を食う 悦 郎
母の日の母が炊いている小豆飯 吸 江
鬼探がす豆を握って寝てしまひ 岳 人
節分に撒きすてられた豆の愚痴 生々庵
掌の豆を税吏も見逃がさず 吸 江
福豆は鬼もよろこぶ美女が撒き 重 人
豆餅を焼くはるかなる郷愁よ 冬 二
人間のエゴ高らかに豆を撒き 柳 志
豆まきに団地の窓は閉めたまま 弥 生
寄り道の先きでも豆をまかされる 岳 人
豆粒程の存在ですとへり下り 吸 江
年豆に奥歯の穴は隠されず 三 四
五色豆京の余韻をまだ残し 葵 水
つきだしは煎り豆だけのくだを巻き 重 人
節分の豆旅先で食べてくる 花 梢
耳底に残る豆撒く父の声 生々庵
甘納豆女のつぎの嘘を待つ 小松園
四階の窓から豆の降る団地 天 笑
豆タレントもう両親の手に負えず 一 三 天
豆まきの鬼にされてるアルバイト 竹 荘
豆記者の真面目な問いにうろたえる 柳 宏 子
ヤク年へ弱気になった豆をかむ 筑 前
節分の豆を隣りでもうてくる 虎 梢
豆粒ほどの石の魅力へ愛を賭け 牧 人
席題「ニセ者」 神谷凡九郎選

ニセ医者から脱けた命はつとする 君 子
どの医者も・医者らしく見せる記事 あい 子
偽者をそのまま帰すゆとり持ち 小松園
にせ者に自信もたせた不文律 筑 前
神様を横に向かしてニセは生き 一 三 天
ニセ者としての笑顔を絶やさない 天 笑
体験のフィクションニセ者らしく 葵 水
あまりにも本人らしくてうたぐられ 頂 留 子
ニセ者と知らずお見合いかしこまり 維 久 子
替え玉と知らず女は思案する 寿 界
ニセ者がビエロの役をしてくれる 水 客
一斉休診偽医も今日は歩を合わせ 花 梢
ニセ医の瞳に重くなる空のいろ 冬 二
ニセ者の笛吹くことも覚えてき 水 客
レントゲンニセ医を撮す窓がない 滋 雀
妥協癖ついてニセ者らしくなし 水 客
金バッジ襟に政治を餌食とす 牧 人
人間のルールニセ者こしらえる 古 方
一見紳士風という手配書 栗 葉
紙きれ一枚あるので・者とはならず 古 方
僕自身かてニセ者やないやろか 凡 九 郎
席題「上位」 水谷竹荘選

古方 古方 靜馬 圭井堂 小松園 天笑 吸江 柳宏子 維久子 醉々 花梢 儀一人 岳客 水贊 季雀 滋人 重人 形人 庸佑 庸佑 栞 一三夫 一三夫 一三夫 三十四 圭井堂 智一 儀一 新之助 一二三 千乃子

兼題「ジャンボ」 児島与呂志 選

ンボ機が2DKの上を飛び酔々

戸田古方

自然は美しい。その美さを歪める人間。人間同士のかかり合いの中には更に醜いもの、弱いもの、阿呆らしいもの一杯詰まっている。自然の姿に酔えば美しい詩となる。理想も謡い上げられるだろう。人間を直視すれば、その長所からも短所からも、

覆いきれない笑いがにじみ出る。どれもこれもすぐれた川柳になる。俳諧はこうした日本人の伝統的な心のすざびであり、川柳と俳句の母胎でもある。

兼題「叩く」

橘高薫風選

叩かれて叩き返えして恋芽生え
 ほとほとと女心の戸を叩く
 レスビアンめき女学生叩きあい
 ピアノ叩くその横顔は蠟人形
 ハミングで洗濯物の白叩く
 叩かれて好きなカレーも食わず寝る
 故郷の唄に手拍子強くなり
 無茶でも酔えばやっぱり手を叩く
 満三つ叩けば親を叩いて来
 我が子なら叩いてやるがなと思ひ
 銭湯で十円だけの肩叩き
 叩かれて魚板は野狐の音を立て
 カゲ口を叩いてゴマを摺っている
 叩かれてからまたかぬ小さい意地
 評論家金が貰える叩きよう
 正論も大臣故に叩かれる
 冬越した蠅だよ叩く気になれず
 叩く真似するだけと犬知って居り
 叩かれた一瞬他人の顔となる
 欲張った角の頭を歩が叩く
 人間の弱味は金に叩かれる
 叩き売りドルショックから説き聞か
 肩叩く先輩がおりついて行く
 戸を叩く音暫くは知らぬ振り
 ホステスの肩を叩いてツケにする
 テーブルを叩くたびに票が逃げ
 叩かれたとこを家裁で見てもらい
 岩の面叩いて坐るひとりばい
 反論をしたくないから机を叩く
 叩くのも泣くのも早い末娘
 飲み込めぬ理屈の肩を叩かれる

一 栄
 与呂志
 三夫
 智子
 静馬
 慶之助
 竹莊
 慶之助
 儀一
 鬼遊
 柳志
 千寿子
 生々庵
 柳志
 圭井堂
 圭井堂
 トメ子
 花梢
 牧人
 雀踊子
 多志
 季替
 綾女
 葵水
 生々庵
 小松園
 大茂津
 悦郎
 維久子
 葵水

出席―与呂志・新之助・いさむ・
 古方・柳志・花梢・滋雀・天笑・飄
 太・一三夫・水客・儀一・祐司・敏
 ・圭井堂・文秋・静馬・柳宏子・三
 十四・好一・千万子・トメ子・綾女
 ・多志・岳人・喜風・維久子・誓
 ・重人・寿界・酔々・形水・薫風
 ・悦郎・吸江・生々庵・一二三・凡
 九郎・冬二・慶之助・葛城・榮・竹
 莊・頂留子・眉水・雀踊子・宣介・
 牧人・金三・智子・君子・葵水・弥
 生・鬼遊・虎声・正秋・季替・小松
 園・庸佑・筑前・夢成・恒明・あい
 き・葉子。

LOVE LOVE LOVE 恋を
 バナナ売り値ごろへ来ると叩き止め
 男あり地球をてのひらで叩く
 叩き台俺の値ぶみがさされていた
 肩叩く娘の嫁ぐ日を数えてる
 肩一つ叩かれ仕事預けられ
 久し振り喪服の肩が叩かれず
 叩かれて筆の力を思い知り

多志
 静馬
 冬二
 凡九郎
 千寿子
 慶之助
 水客
 薫風

兼題「美容食」 西田柳宏子 選

血ともならず肉ともならず美容食
 美容食続いている間に嫁きおくれ
 美容食無縁になった妊婦服
 美容食計算通りにやせられず
 美容食齢に相談して見ます
 美容食レモンジュース飲むとする

どんたく
 章雅
 真紗子
 翁童
 一栄
 眉水

美容食してるがもやしのような妻
 意気込みの割りに汚えない美容食
 モデル稼業に身体を賭ける美容食
 変りばえせぬ美容食まだつづけ
 美容食しい物から胃腸変になり
 人間らしい物は食べない美容食
 美容食献立を見てやめにする
 忍耐と背中合わせの美容食
 味覚とは別に三度の美容食
 スタミナに限界を見た美容食
 ヴィーナス像心へ描いて美容食
 美容食妻より夫が先きにやせ
 美容食摂って夜更けのバイを振り
 美容食食キリギリスになりたいか
 なぜかしら効めの薄い美容食
 まだやせるつもりか妻の美容食

千万子
 祐司
 牧人
 葛城
 葛城
 天笑
 庸佑
 花梢
 智子
 庸佑
 美代
 牧人
 一三夫
 新之助
 敏
 維久子
 久司

たのしさひろがる お買物

通商
阪急
 大阪梅田本店
 千里阪急
 神戸三宮支店
 東京大井町支店
 教育棟橋阪急

美容食 ゆき 渡らぬ まま 萎 生々庵
 お隣りも お向いも よと 美容食 多志
 あれに 痩せたい マダム 美容食 小松園
 美容食 やめた 頃から やせてくる 冬二
 ささやかな 市場 籠から 美容食 金三
 不憫とも 思う 悲願の 美容食 鬼遊
 美容食の 女に 飼われて 猫あわれ 弥生
 美容食 プロポーシオンにある 自信 岳人
 美容食 見向きもせず に 母となる 太茂津
 結局は 効果なき 美容食 柳志
 原型は どうにも ならぬ 美容食 静馬
 女の 執念 ます カロリーを せら 古方
 美容食 どころか 赤字の 台所 維久子
 美容食 続け 貧血症 になり 形水
 美容食 体重計が 笑う とき 重人
 美容食 女の 会話 まで 続く 滋雀
 美容食 など うちでも いい 若さ 葵水
 美容食 ちいさな 秤一つ 買う 野迷路
 美容食 バラの 匂いの 部屋に いる 与呂志
 美容食 の 姿が 寒天 透き 通り 水客
 美容食 猫は 見向きも してくれ ず 牧人
 一粒を 押し 戴くも 美容食 古方
 女湯で 聞いて きました 美容食 祐司
 美容食 に 背を 向け 吾が 娘の 健康美 司

兼題「脱」 正 本 水 客 選

三代目 事業に 惚れて 脱し 得ず 一栄
 脱出は 諦め 壕に 生き 残り 喜風
 波を 脱ぐ 岩に しぶきが 生き 残り 岳人
 冬の 紅少女 は やがて カラを 脱ぐ 寿界
 ベール 脱ぐ 原子に 未来 あて は める 人

脱皮する セミの 命が すき 通り 雀踊子
 脱落の 旅を 流して ギター 弾く 牧人
 脱出 脱出 主観の 違いが 思わ せる 凡九郎
 童顔を 脱ジノクスに 賭けて みる 人笑
 脱師匠 テープの くせの まま 覚え 柳志
 喪服 脱ぎ 女一 さわ 強う なり 維久子
 服 脱いで 妻の 言葉に 負けて やる 筑前
 脱サラに 故郷の 山は 無欲 なり 葉子
 脱国家 そんなら お前よ そへい け 柳宏子
 脱サラリーマン 地下の 喫茶が ふと 恋 栗
 脱サラへ 福富 太郎の 苦心 談 一三夫
 脱出を 本気で 思う サラリーマン 形水
 脱寡婦を 宣言 花を 活ける 幸 葵水
 脱世間 西洋 乞食 潤歩 する 水客
 脱サラリーマン やつて みたい と思 ぬ 庸佑
 脱家族主義に 留守番 たの まれる 水

脱退が 前進 となる 先の 先 恒明
 脱サラの 屋台の 声が 喉で 消え 一二三
 人生を 脱け 出す 酒に 荒れて いる 滋雀
 脱落の 子らへ 譲らぬ 土を 掘り 柳志
 水浴びの 鳥を見ている 脱サラリー 葵水
 脱日本 グラムへ 行く 人 選る 人 滋雀
 いっそんなら 脱人間 になり ない は 凡九郎
 交通 麻痺へ 脱出の 地図 探す 新之助
 脱本業で 株価が ある 世に 変り 喜風
 ドル ショック 脱し 社長も 若く 見え 雀踊子
 脱稿の ここにも 自由の ない 世界 誓二
 脱家族 保護 願い も されて い ず 栗
 脱文明に 逆うて 横井 さん 帰る 水客

西尾 栗 著

「水 鶏 笛」

送料共 六五〇円

西出 一 栄 著

「ね っ く れ す」

送料共 六〇〇円

「清水白柳遺句集」

送料共 七〇〇円



新 芯 気 鋭

いつまでも細く書ける硬質サインペン

黒・赤・青 1本50円

ライオン ジェットペン

福井商事株式会社



▼厚稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

川柳東大阪

竹中肖二報

気の廻る新妻姑がほめたたえ 秀麿
 勧誘に廻ればどこも鍵をかけ 幸子
 地球儀を軽く廻している 野心 雀踊子
 人生譜廻り灯籠に似た私 六龍子
 陶工のロクロが廻る 古都静か 湖風
 偽ダイヤでもよし女の心満つ 綾女
 鑑定家息整えて鞘はらう 肖二
 鑑定料出して偽物と決められる 秀信
 名刺までそっくりな偽物で逃げ 以兆
 贋物が本物と席へ並べられ 鎮夢
 贋物が本物と席へ並べられ 連彦
 北風に女の嘘がけづられる 天樹
 瞬間の風にも母はハツとする 悦郎
 耐える日の挽歌流れる風を聞く 静歩
 それからの話団扇の風を受け 鬼遊
 初対面先ずライターで打ちとける 竜之介
 お写真とはよくみてますと初対面 大丘子
 イメージとびつたり合った初対面 あいき
 初対面指のダイヤを見くらべる 酔々
 一億の一人と会った初対面 酔々

初対面 すぐにも年を聞きたがり 弥生
 初対面 折り目正しい人と知る 三十四
 口ぐせをたしなめられて 苦笑い 徳里
 笑うより仕方がないほどの 苦笑い 新之助
 皇后様を真似て鏡に笑うて見 一栄
 一生を笑い続ける 福の神 喜正
 集金へニコッとせす 札を出し 儀一
 だらんの笑い子なしをうらやませ 文秋
 嘲笑う瞳にさりげなく 頭下げ 都詩子
 只笑うて女は本心はぐらかし 誓二
 太つて笑って済ませて呉れた人 凡路
 笑うては済まぬ話へ出る 笑い 喜風
 お隣と笑いで済ます 兎の喧嘩 和子
 吉報と一緒に笑顔飛んで来る 欣多楼
 書き残す紙が物言う 遺産分け 葵水
 紙屑になる 運命のピラを 刷る 古方
 美濃紙のこころを守り 孤り居る 寿界
 一枚の紙幣に理性崩れ いく 竹充
 刷り上げた魚拓自慢が一つ ぶえ 鳴
 黙々と老の手で 梳く 民芸紙 佳三
 一枚の紙で家ごと押えられ 思月
 さりげなく 母紙包に ぎら せる 豊三
 八尾菜の花川柳会 飯田悦郎報
 お二階へ来客毎に下がもめ 鶴声
 乗り替えにうろうろしてる地下二階 牧人
 上下に住んで二階の名も知らず 圭井堂
 二階からどやどやと朝が来る 岳人
 餅を焼く匂いに二階餅りて来る 柳水
 出稼ぎが戻ったらしい餅を 搗き 小松園
 お妾の膝とうすうす 猫も 知り 千寿子
 反抗期猫をなでたり なぐったり 千寿子

旦那とは相性の悪い ペルシャ猫 静馬
 猫の恋隣の犬が勘を立て 河産
 猫かぶる後姿をひやかされ 静歩
 経験の不足をさとした物語 天笑
 その先きは誰も知らない物語 つき子
 物語るように名所の梅開く 悦郎
 ラブストーリー一人観に行く不倅せ 力
 物語 惜くべたして つづけられ 葉
 風の子にお伽話の後戻り 葵水
 厚化粧女に嘘が つきまとい 飛鳥
 茶をすめる 尼僧女として化粧 萬の
 厚化粧 粧落して 慈母の顔になり 儀一
 お化粧の稽古をせよと娘をしかり 肖二
 運命線 握りしめて いる 軍手 酔々
 先生が脈を 握ると 石になる 花梢
 一握りの奴等と呼んで無視出来ず 凡九郎
 吊皮を 握って 気付く 手の よこれ 綾女
 子を 握る 乳房に 愛が 満ちて来る 鬼遊
 握る こと 覚え 男の 素顔 消え 美代
 南大阪川柳会 金井文秋報
 新人賞まだ泣いている フィナーレ 好郎
 それとなく妬心のほろろ荒れている 美代
 起ち上った 去りやらぬ フィナーレ 圭井堂
 セカセカと 盲目の 杖も 十二月 肖二
 支払いがたまり手酌で ほんとと かれ 新之助
 参観日 口添えしたい ママが 居る 金三
 還暦も越えて じいちゃんらしくなり 好一
 子の 寝顔 手酌 静かな 酔いになり 小松園
 度を越すと 妻に 徳利を ぎ取られ 儀一
 口添えが オッチョコチョイで 軽見 舟
 口添えのいる娘で 恋が はかどらず 智子

子の善意杖嬉しくてさびしうて
末席の手酌へ妓知らん顔
フィナーレ飾ってくれた子の出世
隣りまで目出度い朝を掃き清め
いただいたいのちのままで年を越す
一晚をもち越す嘘に夜がながい
化粧する間をたのしんでいる手酌
鉢巻きをして聖職の域を越え
フィナーレきよう声に沸く花吹雪
夕陽燃ゆ倅せぬ日のフィナーレ
はうき持つすべを知らない嫁が来る
傍杖を猫が一足先きに逃げ
手酌にもサービス料はちゃんととり
ライバルと知らず口添え頼み込み
フィナーレなみだなみだで幕が下り
口添えが無いと坊ちゃん喋れない
お銚子を振って手酌のひとりごと
庭掃除巫女のひばかま視線吸う
どんぐり川柳会(大阪市) 川村好郎報

風向きにかかわりもなし 忠魂碑
切り下げへ一円玉が陽の目見る
風向きを避ける 面会謝絶なり
風向きを電話でたし飲みなおし
やと二人になつてお腹がすいて
ネオンの灯デノミに遠慮なく灯り
風向きが変つた愛がはしたなく
風向きが変わる 気配に座を外し
風向きを見ながら靴のチャック開け
風向きが変つて喉仏が動き
風向きをさけ聞き流す事に馴れ

二三
形二
誓水
滋雀
古方
花稍
葵水
醉々
頂留子
静香
文秋
喜風
綾女
水京
君子
静馬
一栄
章雅

真砂 悦郎 吸保 儀々 醉春 草風 喜好 史史 修史 いわを

札東に女風向き変えてくる
風向きが変り仲裁のろけられ
重役の椅子へ風向き真正面
風向きが変り銚子を持って立ち
デノミにも変ることなくドヤは昏れ
食欲が無いので 食器替えてみる
夢中でしたと釣銭だけは握ってる
温泉へ来ても 風向きうかがう身
どんぐり川柳会(羽曳野市) 川村好郎報

特売のムードが 家計簿にひびき
物静かなムードに借金切り出せば
もの云わぬ回転椅子が待つドラマ
譲られた椅子の 温みを身に感じ
考える 人の ポーズを椅子 支え
貧しくてもムード我家を引立てる
椅子めぐる 人の 葛藤椅子 知らず
おあいその見でからムードもう寝る
川柳大阪 児島与呂志報

きつちりと義理を済ました年の暮
歳末やせかせかせかと パフ叩く
胡蝶

比呂路
生長
孝子
鬼遊
凡子
小松園
薫風
桂馬
吐江
吸来
悦郎
醉々
竜虎
文作
好郎

一分間の柳論

新聞、雑誌等の柳壇は次代後継者を育てる窓口である。それは誰にでもわかりやすく、その時代の生活を創ったものでありたい。統計によると年齢に反比例して若い人ほど作句者が減っている。なんと淋しい限りだ。かりに歌謡曲はその時代に沿うた生活を充分に唄っている、歌詞も誰にも判る俗語で記るされている。それにくらべると

小走りの下駄歳末の音をたて
泣き笑いさして今年のフィナーレ
歳末へ小唄の習う日が狂い
ボーンズが吹てボツボツと客が寄り
ギャンブルに似た歳末へ客が寄り
飛んで来たボール掴んだ五葉の松
松葉杖が身の一部と手入れる
由緒ある松は 道路を迂回させ
なるように 成って後半 煙草の輪
夢を追う女瞳の澄んだ色
夢多い年頃よく 食べよく 喋り
日雇いのうたた寝白く 雲流れ
たすきかけ 大阪の 夢を 説き
もてます 男前です 金はない
歳末はボーンズ目当てにチラシふえ
門松へ郷愁見せる お歳寄り
妻だけが信じて くれる 男前
川柳わかやま 垂井葵水報

本蔭樺
孤舟
凡々
戸月
秀峰
鴨吉
誓二
重人
洛醉
漁人
笑風
徹敏
蟻香
徳松
与呂志
千枝子
佳宵

大鶴喜由

川柳はなる程生活には触れるが、一歩進め
ていいこと、悪いこと、みにくいこと等
は触れずに、片隅で何かうそぶいているよ
うに感じられる。
思うにその時代の生活の記録はその時代
の人が句にせず誰が句にするのか、よろし
く大上段に構えて切り込んでいくべきだ。
川柳は鋭さが使命だと私は信じる。

一分間の柳論

山本素郎

川柳は、人間と宇宙万象との実相を正しく伝達する倫理である。そして、川柳する目的は、文学がテーマとする愛と、詩の本然たる美を自身に培養して、永遠への息吹きとするにある。麻生路郎師が「一句を残せ」とも「川柳は人間陶冶の詩である」とも謂われた所以だ。ゆえに、誰もが純粹に取り組み、理解を容易にして共感したものである。私は、川柳は「道」であって「術」ではないとおもっている。

ひところ――路郎師の『雲の峰』が遺句となるや、師を追慕する情もわからなくはないが、やたら、うすぎたない雲の峰が視界をけがらせた。また、ある異色作家の作風を平然と模倣して消化不良を露呈。作家的良心もどこかへ飛ばした流行の傾向にヒンシュクしたのは私ひとりではなかったとおもう。

よしや名句に至らずとも、安易に、阿世、亜流に与することなく、堂々と、みずからのものをつくっていただきたい。

印象の深いお顔とはめてる氣
嬉しさを隠しきれない顔で待ち
ブレーキをかけ続け来てて寡婦五十
危機一髪ブレーキど肝までかかり
急ブレーキ安心してからどなりつけ
賢妻としてのブレーキよく締まり
ブレーキを踏むたびが氣にかかり
功成つて庭に茶室がほしくなり
布施行に和顔愛語を入れている
仲人が言う程でない顔が来る
孫の絵は顔に手をつけ足をつけ
庭石へ氣絶しそうな金を出し
大輪をさかせた庭が見える位置
手の平のような庭にも四季が来る
花のない庭土いつもかわいてる
乳くれる顔じつと見て子は育ち
タクはいま庭でクラブを振ってます
雑草の茂るにまかす過疎の庭
校庭の記念樹劣等生も植え
中庭の隅に小さく猫の墓
嘘をもつ女の顔にあるかげり
化粧品売りつけられる顔揃う
借景に東山あり京の庭
ブレーキにタイヤ痛いと音をあげる
美容師に顔に似合ぬ無理を言う
しょぼくれた社長の顔がまばゆくて
師走空マブレーキの締め放なし
お互いのブレーキ線越えず済み
危機一髪ブレーキ効いてよかったネ
ブレーキは妻の財布に入れたまま
弘生
とみ子
里美
ふみよ
亀川
喜一
春亭
裕栄
照代
延伊知
美智也
良四郎
義彦
和恵
まさお
一風
久司
四四坊
俊
千寿子
美代子
太茂津
富子
正夫
一光
竜
みさを
葵水
三幸報

盃へ思わず触れた禁酒の手
洒落れた髪明治の髪に続いてる
あつかまし選挙目当のハガキ来る
年賀はがき七枚ばかり祖父の春
住所不明年賀ハガキが舞い戻り
年賀状また一人減り古き友
絵はがきで行く先き先の旅だより
葉書代きズタイズに消えてゆき
細い字を書いてハガキで間に合せ
ネクタイの派手に引立つ洒落男
生きていたのかと葉書に目がるむ
洒落もなく他人の顔の老夫婦
洒落気などつくに捨てた膝を抱く
二次会になってますます汚れる洒落
ボールペンで蜜柑の礼のはがき来る
返盃をしたがなんだか氣にかかり
三幸
南海電鉄川柳会(大阪市) 辻圭水報
各停で急行料は飲むとしよ 双楽

あみ物をして各停乗り越さず
子を連れて各停にする夕涼み
各停がとまる新駅祝賀会
各停に乗って潮の香満喫し
鈍行でチビリチビリと一人旅
各停を選んですわる年令となり
急行待ちにウナ電を握りしめ
各停で史蹟巡りの駅に立ち
川柳たけはら 森井善居報

責任をのがれる補聴器をはずす
手離れた日からぐんぐん上がる株
お駄賃をとられつり銭までとられ
花かざりつけておしやれな茗荷の子
ベテランの貫禄言葉葉飾らない
ああ七十扶養家族の列に入る
特売場女に遠き妻を見る
天を突く巨木は孤独に耐えて立ち
金魚鉢天女の舞いをふと思い
柳信
宏子
貴山
和郎
誓二
圭水
儀一
金三
扇水
五湖
かつ子
西合
不動
鼓草
郷愁
秋月
千百合

やんわりときついこと言うて来た
ヒッピーに走る若さを惜しまれる
学歴なくとも計算機は素直
もう帰るのかと老母の背が丸い
適合期わたしもラインに立っており
これだけはこぶしの中にある自信
妻がいて子がいて汗の流し甲斐
病室を訪えば恋人らしく見え
黒い蝶黒い屋根桁に身をかくし
パイパイを覚えた孫のサヨウナラ
合掌のまぶたに兄の音がする
走れない足へ信号早すぎる
風鈴が鳴る鳴る初秋夕焼ける
苔寺のおごそかにふるセミの声
ジンクスを氣にして淵にはまりこみ

季 藤
路 秋
操 泉
淨 美
法 子
英 詩
大 陸
日 出
雅 宏
康 宏
鬼 塚
峰 泉
笑 子
一 路

ふるさとは銀座通りに石仏
日曜大工やつぱり男とおだてられ
過疎の霧鎌持つひとの吐息かも
晩酌がまずい小さな悔いがあり
苦しみが絶えまじんのよとよく肥り
ぼけた蚊が出て来て叩く気になれず
でで虫の道なお速き小枝なり
泣きばくろ女の夢はすぐこれ
欠点をカバーし合って嫁姑
物価高小使いだけは同じなり
休耕田こぼれたみに穂がのぞき
予期しないことで狂った走馬灯
灯に祈る妻よ嘆くな俺がいる
寄付だとは言わず広告代と出る
秋そぞろおしろい花も種こぼす

こ ぶ み
英 子
不 朽
美 佐 雄
貞 子
千 代 美
政 己
蘭 幸
春 昇
凡 子
洋 女
房 子
静 水
天 石 庵
紫 苑 莊

雅号ぶつちやけばなし (91)

ひ ふ み



藤井一二三

ふ じ い

後年、息子が五七五の川柳で苦勞する？
するのを予測したのではあるまいが「一二三」とは（雅号にも使える）有難い変った名前を付けて呉れたものである。マッサラな袍を枕元に飾って喜んで一人息子の小学校入学の姿を見る事なく、約一週間前の昭和八年三月急に他界した父、その父を偲ぶ為にも親孝行の心算で本名を雅号としています。変った名前だけに少々文字の間違った郵便でも無事届けて戴ける便利さもあります。川柳を学んで三年、生命ある句などと大それた事は云わぬまでも人間の哀歎を詠みたいと考えています。雅号までつけて帰らぬ旅にたち

（会社員 四十五歳）

やはり田を売って隣も家が建ち
切り札の愛語は胸に秘めておこ
城北明朗句会
川口弘生報

根生で一言だけはしましいこみ
養うてどの子も親の氣に入らず
根性はどの子も親の氣に入らず
ライバルがあつて生れた新記録
年寄は根性ぬきで愛される
金も名もないが根性と腕がある
勝負師は運にうち勝つど根性
ドルショック今が根性の見せどころ
年に似ず負けん気だけは笑われる
挨拶に儲りまつかのど根性
恋人の前で根性見せたがとき
秋冷を指に指輪をはめるとき
明治者ショートパンツに目をそらす
川柳ささやま句会
河原みのる報

口止めの指に静かな酒の息
商品券意外な口止め暗示する
口止めの鍵を忘れた胸さわぎ
あの人なら堅いと信じたその口で
口止めが付いて噂じや死んでおり
仏様を口止めさせてつまみ喰い
村中へ口止め付きの噂立ち
終着はテプレコダに吹き込みて
人生の終着孫や子を集め
荷を降ろす終着駅は急がない
霊柩車最終着へひた走り
終着と始発を区切る除夜の鐘
長靴は片方でよしクリスマス
春峰

越 山
百 合 子
掬 水
よしの
茂 広
吉 裕
孝
新ヤン
八 陣
緑 村
初 音
梅 枝
春 峰

（次号へつづく）

4月の兼題

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

電話大阪・二七一—三九八五
振替口座 大阪・三三三六八

高島屋

・ペン・ペン草・

★早春―好きな文字である十七、八歳の少女の感じだ。
★例年なら三月号には女流作家に何か書いてもらおうの

だが、本号は正本水客氏に「女流作家ベスト・10」をご執筆ねがった。やはり雑誌は休まず毎月出していただきたい。

★山田季賀氏は三十年勤続効続章の国鉄マンだが、氏のお世話で山陽新幹線を試

疲労・肩こり・神経痛に

アリナミンA

☆5ミリ錠・25ミリ錠があります

☆食後すぐのものが効果的です

☆くわしくは医師や薬局・薬店で



A-98

乗した。1月10日の第一陣

組は季賀、柳宏子、静馬、

一三夫。1月28日には生々

庵、黄風、与呂志諸氏の第

二陣組。本号の記事は第一

陣組のものである。

★本号から「一分間の柳論」

が新登場する、一言言を持

つ人に毎号二、三言ずつ発

表していく。もうすこしス

ペースがほしいという執筆

陣の声もあるが、限られた

ページ数に一人でも多く、

葉子コーナー

▼四年前までは春の訪れ

とともに編集室から前方

を見ると、クルマの走る

長堀橋筋に柳の青める装

いが見え、ひと息入れる

時の楽しみでした。それ

が今ではビルの窓々。

▼心斎橋にヤング向きの

店が東京・神戸から進出

してきて目の保養になり

ますが、私には柳のない

道のように年令的にちょ

っとさびしいことです。

「目次」に雅号を出したい

のがボクの「目次哲学」で

ある。機会があればボクの

「目次考」を書いてみたい」

★麻生霞乃先生から「老

人の日記より」をいただい

た。一昧読していただきたい。

★四月号から雑誌選者がか

わる。生々庵主幹のご多忙

は筆舌につくせないが、こ

の機会に五月ごろ渡米され

る予定である。

★二賞の中間発表を「か月

くりあげ本号から毎年三月

号に第一回分を発表するこ

とにした。

★本誌の目玉読み物の一つ

「川柳柳研究」の指導

をしておられる岡田甫先生

から「川柳東海道(上)」日

本橋・大井川「五百五十枚

が出たが贈呈はしない。本

屋で買ってはいい。それ

は「川柳の本は案外に売れ

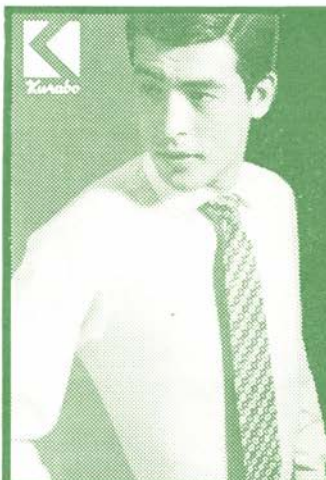
るものだ」という認識を出

版社に持ってもらいたいの

だ、とのことだった。そこ

に、まだ書ける余白があれ

品質でリードするクラブハウのシャツ



倉敷紡績株式会社

れがプロ意識というものであり、真の川柳の社会化であるとおもった。

★路郎先生も寄稿誌を節減

された。「買ってもらうな

いと雑誌は伸びない」これ

もプロ意識のあらわれであ

る。

★執筆者には稿料を、選者

には選料を、わずかでも

出したいのがボクの夢だ

が、なかなか実現しそうで

ない。

★送られてくる原稿用紙

に、まだ書ける余白があれ

は、うちの葉子さんにハサ

ミで切り取ってもらってい

る。アナ埋めぐらいならこ

れで充分占けるからだ。

★この心がけを私生活に生

かせたら貧乏はしないのだ

が、いまだに貯金通帳なる

ものを持つたことのないボ

ク。(ボクに自慢の出来る

ものはこれくらいかな)

★札幌五輪でジャンプ三賞

独占、横井さんの脱密林。

情報も早春のようにすすが

しい。

(不二田一三夫)

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

南海サービスチェーン

<ホテル・旅館>

◆白浜温泉

国際観光旅館 朝 日

国際観光ホテル ホテルパシフィック

◆勝浦温泉

国際観光旅館 中 の 島

◆湯峰温泉

国際観光旅館 湯 の 峯 荘

◆新和歌浦

国際観光旅館 萬 波

◆徳島鳴門

国際観光旅館 鳴 門

国際観光旅館 鳴門公園ホテル

◆紀北橋本

観光旅館 紀 の 川 苑

◆泉南淡輪海岸

観光旅館 淡 の 輪 苑

◆大阪なんば ホテル 南海

お問合せ・お申込み 南海交通社
 日本交通公社・サービスチェーン
 大阪案内所 06-(631)-0222

南海電鉄



豚饅・焼売・焼餃子

大阪・なんば



TEL (641) 0551~2

出張販売店

なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋
 京阪デパート/堂島地下センター/弁天阜頭支店/中之島サン・ストア